
機巧アリスに口付けを

水守秀一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機巧アリスに口付けを

【Nコード】

N9026X

【作者名】

水守秀一

【あらすじ】

Automatic Livingdoll Common (Custom) Edition。通称アリス。

高度な知性を備えた女性型アンドロイドの普及する21世紀末の東京。

彼女らの人格改修を生業とする「調律師」朝倉冬治の元に、ある日1件の依頼が舞い込む。奇態な依頼内容に戸惑いながらも応諾する冬治だが、目の前に現れたアリスは、かつて愛した一人の女性に余りにも良く似ていて……。

— P r o l o g u e (前書き)

タイトルが読みにくいので補足します。

「機巧アリス」は「からくりありす」と読みます。

— P r o l o g u e

— P r o l o g u e

あれはいつのことだったか。

錆色の空が重たい雨を吐き出し、小さな肩をしとどに濡らしていたことを覚えている。澄んだ大きな瞳が切なそうに震え、冷たい雨と交じり合った涙が白い頬をそっと伝っては、制服の襟に染みをつくっていた。

もう会えないわけじゃない。永劫の別れとはとても呼べない。ありふれた、つまらない別離に過ぎないはずだった。だけどその涙が、悲しげに遷ろうその瞳が、二度とはこない再開の時を余りにも強く予感させていた。

たった一人の家族だった。互いに父は無し。オレの母の行方は知れず、彼女の母は、何年も前に異国で凶弾に倒れたと聞く。血の縁はなく、何が共通したわけでもない。ただ幼いころより、それしかすぎるもののないかのように、また北に咲いた一輪の花が只管に雨のみを待ち続けるかのように、互いに身を寄せ合って生きてきた。

だから笑えなかった。幸せにつながる別れなら、微笑まねばならないと分かっていた。笑顔で、とびきりの明るい声で、送り出してやるべきだと知っていた。それでも。

「冬、治……」

冷たく悴んだ手で俺の制服の袖をつかみ、彼女が呟く。雨と涙をためた瞼が刹那強く閉じられ、同時に指先にも力がこもる。

「絶対、絶対忘れないでね……」

遠慮がちに開かれた瞼の中で、ダークブラウンの瞳が揺らぐ。悲しみを湛えたそれは、苦痛に歪んでいるようにすら見えた。

「待ってなきゃやだよ？絶対待っててくれなきゃ、やだからね？」
追い詰められた心が、透き通ったソプラノまでも蝕んでいく。喘ぎ

に似た呟きに、俺はただただ、何度も頷いてみせることで答えた。ほっそりとした体軀をそっと抱き寄せ、両の腕に力を込める。

「っ……」

辛うじて言葉を成していた彼女の声は、俺の胸に顔をうずめると同時に、水分を含んだ嗚咽へと変わった。

大丈夫。お前の気持ち、ちゃんと届いてるから。絶対に忘れないから。ずっと待ってるから。

口を開けば叫んでしまいそうで、ただ彼女を困らせるだけの台詞を、何度も叫んでしまいそうで。

胸の中で、彼女の問いかけへの答えを幾度も呟きながら、俺は天を仰ぎ見る。

また会おう、必ず。そうしたら、そうしたらその時は。

頭の奥に、胸の奥に、彼女の弱々しい嗚咽が、いつまでも響き続ける。愛する人の奏でる、悲哀の音色。俺の記憶にある、彼女の最期の音色。

彼女は、戻ってこなかった。

Chapter. 1 アリサ【1】

Chapter. 1 アリサ

「T3200、聞こえるか？」

少女がゆっくりと瞳を開く。その様を確認し、俺は胸に抱えた小型端末に電子ペンを走らせる。SystemAllGreen。ベツド脇に腰掛けて上体を軽くひねり、寝そべる少女の額に手を当てる。そのまま首筋に指先を滑らせ、脈拍を確認した。

「OKだ。T3200、起き上がってみてくれ」

体温調節機能及び脈動、触診上も問題なし。小さな掌を軽く握り、少女に身を起こさせる。数秒の沈黙。突如はっとしたように大きな瞳を見開くと、少女は俺の手を乱暴に振り払った。

「き、気安く触んないでよっ。このヤブ医者っ」

甲高い声で叫ぶと、素早く身を引き細く端正な眉を吊り上げて俺をねめつける。僅かに上気した頬が、LEDランプに照らされて妙に輝いて見える。

「それから、わたしはアリサ。型番で呼ぶなヤブ医者っ」

頬を膨らませ、眉間に皺をつくって怒鳴る。無駄に声がでかい。

「だったらオレのことちゃんと呼んでくれ。医者じゃなくて調律師だしな。朝倉先生、とか、冬治さん、でもいいぞ。ヤブなんてのは論外だ」

優しくそう言ってみれば、小さく鼻を鳴らしてそっぽを向く。一つため息。だがこれでいい。

「で、気分はどうだ？」

端末をサイドテーブルにそっと置き、もう触れないよと両手を開いて見せてから、問いかける。鋭い眼光はそのままに、少女は呟くように答えた。

「いいわけないでしょ……。あっちこっち触られたし……」

ようやくと俺から視線を外すと、不快感と羞恥心がぶり返したのか、少女は僅かに目を細めた。

「診察の一環なんだから、仕方ないだろ？それにもう終わったんだ。あんまり怒るな」

サイドテーブルの端末を再び手に取り、部屋の隅に設置されたデスクに移動する。引き出しから親指程の金属棒を取り出すと、先端を液晶画面に向けた。小さな駆動音と共に、金属棒に刻まれた1ミリ程の溝が赤く明滅する。同時に小型端末の電源が落ちた。オートマティックシール。液晶画面のハードキャプチャを瞬間的に取得する道具だ。デスクに備え付けられている大型の液晶パネルと無線でリンクしているため、この操作で小型端末に入力した内容は全てデスクの本体に移されたことになる。今更だが、便利な世の中になったものだ。

「兎に角、どこか異常はないか確認したい。お前の感覚でいい。調子はどうだ？」

デスクの上のプラスチックボトルを手に取り、差し出しながら尋ねる。ボトルを受け取り、軽く伸びをしてみせると、少女は頷いた。「問題ない」ととって良いようだ。

「ならいい。作業はこれで全部完了だ。お疲れ様」

ほっとしたせいか、直前のやり取りを一瞬忘れた。頭でも撫でてやろうと手を伸ばし、思い切り振り払われる。続いてボトルが飛んできた。

「触んなって言うてんでしょっ」

寸でのところで身をひねって避けたボトルは壁にぶつかり、サイドチェアの上へ。置いてあった小型端末に少し、モノトーンのワンピースに盛大に、内容液をぶちまけた。

「……」

大きくため息。さすがにやりすぎたと思ったのか、少女も押し黙る。「寝てろ。お前」

叱責の声に身構える少女にそう告げると、サイドチェアに向かっ

た

Chapter. 1 アリサ 【2】

アリサが眠ったのを確認し、自室に戻った。自室は職場と屋根を同じくする居住空間の一室で、先刻までアリサの罵詈雑言が響いていた研究室とは、廊下を一本隔てた真向かいにある。固めのソファに腰を沈めると、サイドテーブルに備え付けられたタッチパネルに指を滑らせた。広さにして8畳程の洋室の隅、簡素なキッチンからゴトゴトとミルの挽かれる音が響く。背もたれに完全に身を預けると、天を仰ぐようにしてゆっくりと目を閉じた。

Automatic Living Doll Common (Custom) Edition。通称アリス。10年ほど前に国内最大の精密機器ベンダーであるPhysical Illusion社から発売された女性型アンドロイドだ。15歳女性程度の思考能力と語彙力を有し、10歳女性程度の運動能力を備えている。極めて精緻な人格プログラムと体表を覆う人工皮膚の恩恵で、外貌と行動だけで見たのなら、人間の少女と僅かほどの違いもない。一体1250万円という高額な商品であるにもかかわらず、アリスは発売から僅か1年で100万体制を出荷。Physical Illusion社は発売年度の業績予想で、当初発表に比して経常利益270%増ともなる上方修正を最終的に迫られた。世紀末も近い近年、21世紀最大のヒット商品ともなる可能性を秘めているとして、全国的にアリスの販売強化キャンペーンが勢いを増している。

「子宝に恵まれなかった夫婦の究極的な癒しとして、あるいは、永続的に稼動し続ける最強の家事手伝い、ベビーシッターとして」Physical Illusion社のアリス開発プロジェクトを特集したドキュメンタリー番組で、以前販売責任者がそのような発言をしていた。だが妄言だ。開発プロジェクトの定義段階でどれほどに清廉な目的があったかは知らないが、アリスの爆発的なヒットの理由は他にある。それはアリスの体躯の「ありとあらゆる部位」

が人間と同様の造りをもっているということだ。無論アンドロイドである以上、人間が感じる諸般の感覚は持ち合わせていない。痛みを感じることはなく、片腕が切断されようが平気で動き続ける。子を産むこともできず、涙を流すこともない。髪、睫、眉、陰毛を除いた体毛は元より生えておらず、一度抜けたものが再び生え揃うこともない。ただ、股関節付近に位置する例の部位は、極めて精巧に形作られている。出産という機能が存在せず、また排尿もしないにも関わらず、そのためのパーツは存在するのだ。それが何を意味するか等、言わずもなだろう。

キッチンから良い匂いが漂ってきた。コーヒーが入ったらしい。サイドテーブルに再び手を伸ばし、パネルの右下の表示された「discharge」のアイコンに触れる。キッチンに置かれた円筒状の無機質なコーヒーメーカーからカップにコーヒーを注ぐ音が聞こえ始めた。部屋隅のキッチンまで数歩歩くと、カップを取り、再びソファへ戻る。砂糖もミルクも必要ない。コーヒーメーカーは事前にプログラムしてあるオレの好みにそって、それらを既に投入してくれている。淹れたてのコーヒーの香りを楽しみながら、オレはふと、アリスの顔を思い出した。

勝気につり上がった細い眉。意思の強そうな大きな瞳。大きな身振り手振りで、オレに対し怒りらしきものを訴えていたアリス。はねっかえりで強気なあの性格は、彼女の内部に組み込まれた人格プログラムのよるものだ。人間のような、複雑怪奇な本物の感情、本物の意思ではなく、あくまでプログラム。プログラムによって彼女の性格は形作られ、形作られた性格に基づき、言動の決定が行われる。プログラム。あくまでもプログラム。プログラムは、書き換えられる。

「朝倉先生ですね？」

10日前、事前の連絡通りこの研究室を来訪した少女は、玄関ドアを背に優しい音色を響かせた。

「本日からお世話になります。アリスTタイプ3200です。旦那

様からは、アリサという名前をいただいております」

柔らかな笑顔で、落ち着いた口調で、少女は丁寧にもオレに頭を下げた。どこか仄々とした、有態な言い回しだが、春の日に降り注ぐ陽光のような暖かな雰囲気、とても印象的だった。

日に5時間、計50時間をかけ、オレは「仕事」を済ませた。アリサが非常に協力的であったこともあり、作業は極めて円滑に進んだ。アリサの稼動状態について簡単なチェックとメンテナンスを行い、人格プログラムのバックアップを取得した。研究室に保存してあるニュートラルプログラムをコピーし、依頼主から事前に渡されていた要件書に従って、新しい人格プログラムを生成する。完成したものを、アリサにインストールしたのが今朝方。人格プログラムを書き換えられた姫君から飛び出たのが、先ほどの罵声と言う訳だ。

「調律師 朝倉冬冶工房」。この建物の外壁には、シンプルな明朝体で記された、そんな看板が取り付けられている。助手の類は問わず、「調律師」であるオレ一人で切り盛りしている、小さな工房。工房と名づけてはいるが、コレは業界の慣習に従っただけのもので、内部は極めてメカニカルだ。旧時代的な代物とは違う。

「調律師」はアリスの発売と同時に誕生した、非常に新しい職業だ。アリスの開発プロジェクトに何らかの形で携わった技術者が独立開業しているケースが多く、オレもその経緯を辿った一人に数えられる。消費者はアリスを購入する際、その外貌と性格を数万種類のパターンの中から選択する。基本的に永続的に稼動するアリスは、購入者、いわゆるオーナーにとっても非常に長い時間を共に過ごすパートナーとなる。より自身の好みに合致したアリスを選択できるようにと考案されたシステムで、この販売形式がアリスヒットの原動力の一つとなったのは間違いない。ただ髪型、肌色、顔の造り、乳房のサイズ等、それぞれの組み合わせによる外貌の選択肢が無数に存在するのに対し、複雑な人格プログラムにより構成される性格は、そう多くのパターンを持たない。それ故に、最も好みに近い性格を選択したものの、もう少し従順であれば、もっと社交性を備え

ていれば、等、購入後にアリスの性格に関して大なり小なり不満や要望を感じるオーナーが、かなりの数存在するのだ。そこで、そういった要求に個別対応するのが、俺たち調律師の仕事となる。依頼者であるオーナーからアリスを預かり、事前に記載してもらった要件書に従って、希望通りの人格プログラムを作成、挿入することで、アリスの人格を強制的に改変する。この人格プログラム改変の一連の作業を「調律」と呼び、その効果の程は、朗らかで礼儀正しかったアリスの罵詈雑言が表す通りだ。

「さて……」

コーヒーを飲み干し一息ついたオレは、ソファから大仰に立ち上がる。カップをキッチンの洗浄機上に置くと、そのまま自室を出た。洗浄機の稼動する機械音が、ドアの向こうから控えめに響く。

研究室に戻ると、すぐにデスクに向かった。腰掛けたプレジデントチェアの背後から、アリスの寝息が微かに聞こえている。本当に眠っているわけでもないだろうに。無駄に凝ったアリスの造りに、思わず失笑めいた笑みがこぼれた。

オレを含む「調律師」は、アリスの行動論理等内部システムの専門家であり、アリスの全身を覆う人工皮膚やアンドロイドとしての素体の構成等の機械的部位については然程の知識を持っていない。仔細は分らないが、確か今アリスの立てている微かな呼吸音は、鼻腔の奥に装備されている超小型ファンの稼動音だったはずだ。アリスが今スリープ状態にあるのか、あるいは本当に故障して動作停止しているのかの区別をつけるために実装された機構であると聞いている。リアルな外貌や動作を追及するのは結構なことだが、単にスリープ状態の判別が目的であるならば、体のどこかに小型のランプでもつければ良いだろうにとも思う。

デスクに備え付けられた電子パネルを操作し、アリスの調律依頼書を表示させる。パネル上に専用のペンを滑らせ、依頼書右下に調律完了のサインを記した。表示を要件書に切り替え、同様にすべての要件を満たしている旨を示すチェックを入れていく。ペンに紙と

いった旧時代の遺物を使う機会はこの10年ほどでめっきりと減ったが、パネル上で滑らせる電子ペンとはいえ、たまに使うのは悪くない。ちなみに調律完了のサインを手書きで入力するのは、これもまた業界の慣習のようなものだ。

サインが終わった2つの書類を消し、表示をスケジュールに切り替えた。アリサのオーナーが彼女を迎えに来るのは明後日となっている。調律の作業は先ほどのサインですべて完了となるので、丸2日ほど暇ができたわけだ。軽く伸びをし、さて何をしようかと思案する。

調律を開始する際、たいていのアリスはオレの工房まで一人でやってくる。アリスの思考能力は人間でいうところの15歳程度。工房の場所さえ教えておけば、態々オーナーが付き添ってくる必要はないわけだ。余程距離があれば話は別かもしれないが、まあその場合は普通、もっと近くの工房を利用するだろう。実際アリスの調律工房はいたるところに存在する。調律開始時にアリスが単独で工房を訪れるのに対し、調律完了後の引き取りは、必ずオーナーが迎えに来るよう頼むようにしている。一言でいうならば、トラブル防止のためだ。調律の成果を工房ですぐ確認してもらい、必要であれば簡単な調整程度は無料で行う。アリサのオーナーは元村というよく肥えた中年の男で、成金趣味丸出しのやや気難しそうな、はつきりと言ってしまうえば面倒くさそうな人物だった。確認段階で何かしらの注文をつけてくる可能性はそれなりにありそうに思える。

「T3200、ReBotだ」

チェアをまわしてアリサに向き直り、やや大きめの声で呼びかける。微かな呼吸音が止まり、大きな瞳がゆっくりと開いた。

「その呼び方はやめろって言ってんでしょ。ヤブ医者」

すぐに身を起こし、瞼を半開きにしてねめつけてくる。予想通りの、順調な反応だ。

「医者じゃなくて、調律師だ」

先刻のやり取りをほぼ再現しながら、立ち上がってアリサの隣まで

移動した。ベッドの上で半身を起こしたアリサに向け、右手を差し伸べる。

「起きろ、でかけるぞ」

アリサの瞳が一瞬大きく開き、すぐに伏せられた。不機嫌そうに表情をゆがめ、オレの手から目を背ける。心なしか照れくさそうに見える。

「どうした？」

問いかけると、戸惑ったように一層に顔を背けてしまった。

「なんでもない。てゆうか、何よこの手……」

ボソボソと、呟くように言う。

「ReBot直後だから、起き上がるのに手を貸してやろうかと思っただけだ。何か不愉快だったか？」

「別に……不愉快とかじゃ、ないけど……」

こちらに視線を合わせず、また口元で喋る。不毛なやりとりがわずらわしくなって、アリサの右手首を掴むと、強引に立ち上がらせた。強く引かれバランスを崩した少女が、オレの胸に倒れこむ。鼓動を聞くかのごとく俺の心臓部に頬を寄せ、アリサは一層に表情を強張らせた。

「怒ったか……？」

少々乱暴に過ぎたかと思い、慎重に尋ねる。少女はゆるく首を振り否定の意を示すと、視線をそらしたまま俯いてしまった。

「ふむ……」

本来であれば理解に苦しむ反応ではあるが、この反応の根源的要因は把握している。言うまでもなく、オレが改修した人格プログラムの行動分岐に準じたものだ。青春ごっこにケリをつけるように赤茶けた髪を軽く撫でると、少女の肩をそっと押す。サイドテーブルを親指で指しながら告げた。

「そこに替えの服が置いてある。直ぐに出るからな。着替えてくれ」
指差した先には、薄いブルーのワンピースが置かれている。丁寧にアイロンが掛けられ、畳み方には僅かほどの乱れもない。人格プロ

グラム改修前のアリスが、調律の折をみてやってくれた作業だ。本来の持ち主は以前この工房にいた別のアリス。要は忘れ物だが、取り来ないので使わせてもらっている。

姫君は微動だにしない。いや、微かに頷いたか。俯いた少女の瞳に映っているのは、おそらく真っ白なりノリウムの床だけだろう。

「そこ」を正確に理解したか怪しいものだが、長く付き合っていても埒もない。背を向け、静かに研究室を出た。

Chapter. 1 アリサ 【3】

「まったく……」

何度目かのため息が漏れ出る。随分と難儀な性格になったものだ。オーナーの元村の要望に従い人格プログラムを改修したが、なぜ高い金を払い、態々面倒な性格に変えるのかとうとうわからなかった。アリス本来の存在意義を生活をオールマイティにサポートするパートナーとするならば、10日前の素直なアリサの方が何倍も良いだろうに。

自室の戸を開け、歩きながら白衣を脱ぐ。壁のハンガーにそれを掛けながら、ふと、あの有難くない呼び名はコレのせいかと思に至る。安易な発想だが、まあいい。ならばもう医者ではない。

クローゼットから外出用の上着を取り出す。この5年ほど愛用している、ナチュラルカウのトラッカーだ。細身の体にはよく似合うと自負しているが、友人らからの評判は芳しくない。本皮が醸し出すやや野生的なイメージと、無表情と揶揄される顔立ちとのアンマッチが原因らしい。無表情、上等だ。ポーカーフェイスってヤツだろう。クールでいいじゃないか。

デスクから工房のカードキーを取り上げると、再び廊下に出た。さて、新しい服は姫殿下のお気に召しただろうか。研究室のドアを軽くノックし、声を掛ける。

「アリサ……」

「いま開けたら殺すっ」

言い切らぬうちに応答があった。さっきのだんまりはどこへやらだ。「玄関で待ってる。着替えたら来い」

一人玄関へ向かいながら、苦笑する。いま開けたら殺すとは大したものだ。オーナーと同状況に対峙しても、同じ台詞を吐くのだから。調律を行う際、オレ達調律師はアリスに対し、少々特殊な処理を施す。オーナーに対してと、実際に作業をする調律師に対して、対

象のアリスが同一の態度をとるよう仕向けるのだ。コレを行うか否かで、調律完了後の成果確認の難度が大きく変わってくる。

アリスは自身のメモリの中に、印象値と呼ばれる変数を保持している。自身が関わった人間、新しく存在情報を得た人間に対して、それぞれ個別に印象の良し悪し、インパクトの強弱を数値化して保有するのだ。印象値は0から10000までの整数で、この数値が大きいほど対象の人物に対して好意的な態度をとるようになる。0であるならば会うだけで顔をしかめるだろうし、逆に限界値の10000であるならば靴の裏ですら喜んで舐めるだろう。値は本人がそのアリスとどのように関わったかでリアルタイムに変動し、元の数値が両端、0もしくは10000に近い数値であればあるほど、一回の関わりにおける変動幅が小さくなる。オーナーはアリスを新規に購入する際、自身に対するこの印象値を任意に設定し、さらに数値低下に対するプロテクトを掛ける。このプロテクトにより、オーナーに対するアリスの印象値は低下することがなくなる。アリスが自身のオーナーを嫌ってしまうという状態を避けるためだ。便利なシステムではあるが、個人的にはあまり賛同する気にならない。極端な話最初に10000の印象値を設定してしまえば、例えばそのオーナーがアリスを毎日のように迫害しようとも、アリスは精一杯の愛情をその人物に注ぎ続けるのだから。

現在のアリスの元村に対する印象値は9570。オレに対する印象値も9570。元村に対する値は元来のものだが、オレに対するそれは、調律開始時に改変した言わば偽りの数字。アリスは印象値に基づいてその人物に対する態度を決定する。オーナーに対してと同一の態度を取らせる処理というのが、つまりこの改変を指すわけだ。ちなみに工房訪問時のアリスのオレに対する本来の印象値は6800。オレに対する好感の度合いが1.5倍になった結果、呼び名が朝倉先生からヤブ医者に代わるのだから素晴らしい。プログラム改修後のアリスの性格がいかに捻くれたものかが良くわかる。

玄関にかがみこみ靴紐を結んでいると、背後から乱暴な足音が聞

こえた。どうやらご到着らしい。さて姫君、新しいドレスはお気に召しましたでしょうか。

「ちよつと。何よこの服っ」

振り返るより先に焦ったような台詞が飛んできた。やはりそういう反応か。目を合わせるのは中止し、ことさら時間を掛けて靴紐を結ぶ。

「スースーするし、変なフリフリついてるし……。ていうかこっち見なさいよっ」

キンキンと五月蠅い。仕方なく振り向くと、淡いブルーのワンピースに身を包んだアリスが仁王立ちしている。頬を僅かに染め、小さな両の手は胸元で握り締められている。「フリフリ」は、どうやら肩口のレースの装飾のことらしい。

「フリフリは知らんがな、スースーはしないだろ。そんな感覚を認知する機能はついていないはずだ」

「言ってみただけよっ。いちいち煩い」

一層に声が大きくなる。火に油を注いだらしい。だが改修結果を確認するには良い流れだ。少し好意的な意見を述べてやることにする。

「だが何が不満なんだ？アリスに良く似合ってる。すごく可愛らしいじゃないか」

優しい口調を意識しはしたが、感想そのものに偽りは無い。アリスは文句のつけようのない美少女だ。少々幼い印象はあるが、それだけにこの手の服は良く似合う。まあ容姿に優れているのは、大抵のアリスに共通して言えることでもあるが。

「どうした？」

ただでさえ大きな瞳をいっぱいに見開いたまま、アリスは硬直している。下から瞳を覗き込むと、先程研究室でやってみせたのと同じように、視線をそらして俯いた。

「どうしても嫌なら着替えなおしてきてもいいぞ。まあその場合、さっきの服しか選択肢はないが」

多くのアリスは工房を訪れる際、着替えの類を持参しない。余程滞

在が長くなるなら別だが、精々が2、3週間の滞在なら、そういったものを必要としないのだ。アリスの体を覆う人工皮膚は見た目や触感こそ人間のそれと近似しているが、結局のところ人工物。発汗に代表される代謝現象は起こり得ないし、付着する菌や汚れの類もある程度のレベルまでではあるが、自動的に分解することができず、排泄はしないし、月経も迎えない。帯下等の分泌物とも無縁だ。つまりはそうそうに汚れることがないのだ。今回のアリサも例に漏れず、替えの服は持参してこなかった。さっきまで着せていたのはアリサにはあまりに大きすぎるオレの部屋着。本人が着てきた一張羅は、今朝方のスリープ解除時の大暴れで、姫君御自らオイルまみれにしている。

「さて、どうする？」

立ち上がって少し膝を折り、アリサに目の高さを合わせる。小さな唇が動いた。

「ほ、ほんとに、変じゃない……？」

予想通りの感情分岐。極めて順調だ。

「ああ。すごく可愛い」

言っていてやや気味が悪くもあるが、我慢しよう。次に彼女が口にする台詞は恐らく

「じゃあ……これで、いい」

思い浮かべた言葉と、少女の発した音声が綺麗にリンクする。調律の成果はやはり上々のようだ。

「よし」

まだ少しふわふわして見えるアリサに靴を履くよう促すと、玄関ドアを開け先に外に出る。開いたドアを靴で押さえアリサを待ちながら、何とは無しに空を見上げた。雲ひとつない青空が広がっている。これ以上ないくらいの快晴だ。

—Chapter. 1 アリサ【4】

「お待たせ。うわ、いい天気」

靴を履いたアリサが、ひよこひよこと玄関から出てきた。オレがそうしたように、青空を見上げて大きな瞳を細めてみせる。微笑ましくもあり、馬鹿馬鹿しくもある光景だ。僅かに毀れた笑みにアリサが気づく。目ざといことだ。

「何よっ？」

馬鹿にされたとも思ったか、もう頬を膨らませている。

「いや、よくできていると思うてな。見た目じゃわからんが、眼球の中にあるのは超高精度レンズだろ？ 眩しさは苦痛ではないはずだ」

「そりゃまあ、そうだけどさ……」

露骨な機械扱いに不満そうにしながら、気分よ気分、などと嘯く。それにしても、ころころとよく表情の変わるアリサだ。我侭なのは大きい欠点だが、見ていて飽きないという意味においては、この性格も悪くないかもしれない。いや駄目か、それじゃただの玩具だ。

「そういえばアリサ、お前何センチだ？」

カードキーで玄関ドアに施錠しながら、アリサに問うた。すぐに、良くない聞き方だと気づく。訂正しようとしたが、少女の反応の方が早かった。

「何センチって、どこのサイズ？」

当然だ。アリサに対しては、この手の聞き方をしても伝わらないことが多い。蒙昧に過ぎるのだ。

「済まない。聞きたかったのは身長だ。車に乗るんでな」

この20年ほどで、いわゆる自動車の性能は著しく向上した。車体そのものの頑強さ、事故時における搭乗者の保護機能。個別に上げればきりが無いが、その代償として、搭乗時にはやや手間が掛かるようになった。

「ああ、登録か。ちょっと待って」

今度は質問の意味を理解したらしく、立ち止まって最新の身体情報の取得を開始する。眼球の中央部、人間で言うところの瞳孔の部位に一瞬青白い光が明滅し、直ぐに消えた。スキャンが完了したらしい。

「154.23895。あ、ちょっと縮んでる。変なの」

スキャンに掛かったのは約2秒。便利な機能だ。まあ小数点以下は不要な情報だが。

「体重は？」

「ななじゅ……ってちょっと待った」

気が付いたようだ。車に乗る上で必要な登録情報は身長のみ。体重はシートが自動的に感知する。

「良く気づいたな。だが10の位は聞こえたぞ。中々の重量感だ」

「このっ……」

悔しそうにセラミックの歯を軋ませる。ちなみにアリスは基本的に重い。骨格始め内部は機械なのだから当然だ。見た目、触感、動きの滑らかさ。いかに人間に近づけようとも、重量は誤魔化せない。見た目から予想するに、アリサがもし人間の女性であったならば、恐らくは40キロそこそこの体重しかないだろう。騙される購入者もたまにいと聞く。お姫様抱っこにチャレンジして腰をやるパターンだ。

「ほら、いくぞ」

工房前に停車してある車に向かい、運転席ドアのスリットにカードキーを滑らせる。車のキーと工房の鍵は同一化している。便利だが、紛失した際の被害は大きいだろうとも思う。運転席に乗り込み、内側から助手席ドアのロックを解除した。アリサが乗り込んでくる。

「ねえ身長が縮んだの。前回スキャンしたときは154.24002あったのにさ」

「そのくらいの違いはでるだろう。0.01ミリ程度じゃないか」人間の身長も朝が一番高く、夜になるにつれ縮んでいくと聞く。よ

くは知らないが。

「ほら、ドアちゃんと閉めろ。直ぐに出すぞ」

言いながら、スピードメーター横のパネルに手を伸ばす。アリサの身長を登録。続いてシートが感知した体重が自動的に登録される。さっきの70云々ってやつだ。搭乗者のプライバシーに配慮してか、こちらは画面には表示されない。ふと横を見ると、シートベルトを装着し終えたアリサが、オレの作業を興味深そうに見つめている。

「ねえ、これって何のためにやってるの？」

「何だ。知らないのか？」

意外だった。未登録の知識だったらしい。オーナーの元村が、あまり車を運転しないのかもしれない。

「追突事故なんかの時に、保護機能が働くのは知ってるか？」

アリサが頷く。

「エアバッグが出たり、緩衝シールドを展開したりってやつでしょ？」

「そうだ。エアバッグをどういう角度と密度で放出するか、緩衝シールドを何層に展開するか。搭乗者の身長体重で、最も効果的な値ってヤツが変わってくるんだよ。そのための登録だ」

「ふーん……」

何度も小さく頷きながら、しかし視線は登録パネルから外さない。こういったものに興味があるのだろうか。まあ機械同士仲良くするといいい。

「理解したか？」

「うんうん、理解した。ありがとっ」

アリスは基本的に、習得した知識を永続的に保有し続ける。メモリに登録してから長期にわたり使用されることのなかった情報は予備用のメモリに移されてしまうので読み出しに時間が掛かることはあるが、メモリのどこかには必ず残っている。それだけに、教え甲斐があると言えはあるのだ。

ナビを起動させ、登録してあるルートを呼び出す。シフトレバー

を握った。エンジン音が響き、車が動き出す。

「あ、てかどこいくの？わたしまだ聞いてない」

思い出したように言う。

「どこだと思う？」

「なにそれ。わかんないから聞いてんだっての」

「ちょっとしたサービスだよ。お前のオーナーへのな」

曖昧な物言いだ、隠そうとしたわけじゃない。行き先の固有名詞がとっさに出てこなかっただけだ。だがアリサはそれで得心がいったのか、それ以上の追求はしてこなかった。少し静かになる。アリサが黙ったので、オレも運転に集中することにする。話相手も嫌ではないが、少し疲れてきた。今は静かにしてくれていた方がありがたい。と思ったらまた話しかけられた。

「あのさ……わたしの調律って、上手くいったんだよね？」

唐突に、しかし随分と真剣な声色だった。わずらわしい質問ならそろそろ無視しようかとも思ったが、そういうわけにもいかなさそうだった。

「そう思ってるよ。なんだ、不安か？」

聞くと、少し目を伏せて、小さく頷く。先程までの無駄な元氣はどこへやら。随分しおらしい。

「お前のオーナー、元村さんの要望どおりに、オレは調律を進めたつもりだ。要件書に書いてもらった条項は無論すべて満たしている。ただし、元村さんが100%満足するかまでは保証できん。つまりところ主観だからな」

可能な限り優しい口調を心がけ、しかし言葉を選んで喋る。あまり適当なことは言いたくなかった。

「わかるけど……。でもさ、アンタが見てる限りでは、わたし上手く、やりとりできてるんだよね？」

少女の声に僅かに焦りが混ざる。どうやら本当に不安らしい。

「ああ。それは間違いない。今までの調律成果に比しても、すこぶる順調だ」

そう不安がるな、と付け加え、左手で軽く頭を撫でてやる。アリスは驚いたように一瞬目を見開くと、少しはにかんでから僅かに俯いた。旦那様、喜んでくれるかな、などと呟く。大丈夫さ、きつと。

「お前、音楽は聴くか？」

しんみりと、僅かに濡れた空気を振り払うように、話題を転じた。ナビのタッチパネルを操作し、表示をオーディオに変える。取り込み済みの音楽が一覧で表示された。

「好きなのをかけろ。結構入ってるぞ」

促すと、一応興味は引かれたのか、白い指先が液晶に伸びた。少し前屈みになり、画面をスクロールさせ始める。シートベルトが食い込み、小さな胸が苦しそうだ。

「んー……」

次々に表示を切り替えながら、時折妙なうめき声を漏らしている。画面上に表示されているアーティスト名と、自分の好みとして設定されている情報とを照合しているのだろう。さて何を選ぶのやら。

「んー……」

「おい。まだか」

随分と時間を掛けているので、痺れを切らして声を掛けた。好みの音楽が見当たらないのか。オレは比較的音楽をよく聴く。アイドルと演歌歌手は除いて、オーディオにはそれなりに幅広いジャンルのアーティストが登録してあるはずだ。

「好みのが見当たらないのか？」

聞くと、ようやく画面から指を離れた。大きく頷いてうんと言いつ切る。しおらしくいる期間は終わったらしい。

「一個もねえのかよ。お前家ではどんなの聴いてるんだ？」

アリスの趣味嗜好は、オーナーのそれと合致することが多い。オーナーの好みは自分の好み。人格プログラムの基本的なベクトルでもある。元村は恐らく50歳前後。演歌が好みという可能性も、まあなくはない。

「SHARPとか、CLOCK KNIGHTとか……」

ぽつぽつと、よく聴いているらしいアーティスト名をあげる。真逆だ。どちらもアイドルユニットじゃないか。無論オレのオーディオには登録されていない。

「なんだお前、アイドルが好きなのか？」

アリサがあげた2つは、どちらも確か男性数人組みのアイドルグループだったはずだ。しかしやや古い。2、3年前が人気絶頂だった連中だ。幼い外貌のアリサが言うとは違和感を感じないが、アリサと二人暮らしだと言っていた元村がそれらを聴くとはとても思えない。自分の好みとは別に、アリスの好みを設定したのだろうか。

「まあ、好きって言うか……うん、まあ好きだけど……」
はつきりしない。だが凄まじくどうでもよくもある。

「聴くか？聴くならダウンロードできるぞ」

ナビと一体になったオーディオは、衛星を通じて音楽配信会社の専用サーバにネットワークされている。有料にはなるが、聴きたい曲はタイムレスでナビに落とし込むことができる。

「今はいいよ。ありがとう」

アリサはふるふると首を振り、少し勢いをつけてシートに倒れこんだ。

「アトリエ、遠いの？」

まっすぐに前を見つめたまま、唐突に少女は問うた。ああ、そうだ。先刻咄嗟に出てこなかった単語はそれだ。行き先はきちんと伝わっていたらしい。

「いや、すぐに着くよ。もう10分も掛からない」

同じように前を見たまま答える。この先3つ目の信号を左折すれば、あとは一直線だ。

「そっか。あ、てかねえ、喉渴いた」

ころころと話題が変わる。やはりこいつと喋るのは疲れる。

「そういうのは工房を出る前に言えよ」

「だってそのときはまだ喉渴いてなかったんだもん」

返事の代わりに一つ息を吐き、シフトレバーを握った。路肩に停車

する。

「そこにジャンクショップがある。売ってるだろ」

少し身を乗り出し、助手席側の窓から外を指差す。十数メートル先に、灰色の無機質な建物が見える。見事なまでの長方形で、大きなガラスドアに「JUNK」の文字が記されている。

「買ってくれるのっ？」

急に笑顔になって、しかしやや不安そうに、アリサがオレの顔を覗き込む。

「お前、金は？」

「ポーチの中」

視線を下げ、アリサのシート付近を一瞥する。ワンピースから突き出た白い太股。ポーチらしきものは見当たらない。

「ポーチは？」

「工房の中」

だろうな。工房を出るときから、アリサは何も持っていなかった。

「お茶でいいか？」

「いいよ。お客様から預かった大事なアリスが壊れてもいいのなら」「くそっ」

尻ポケットから財布を取り出し、小さな手に紙幣を一枚握らせる。一番でかいヤツだ。追い払うように手を振って、早く行くように促した。意気揚々と、アリサが車を降りる。ジャンクショップに駆け込んでいった。小さく舌打ち。工房に戻ったら徴収しよう。

アリスは当然、食物から栄養を摂取するようなことはない。食事は採らないし、採ることもできない。アリスの動作に連動し自動発電されるモーターを装備しているため、電源の供給も勿論不要だ。

稼動状態を維持するために唯一必要なのが、マシーナリーオイルと呼ばれる油だ。水に近い触感の極めて粘土の低い液体で、アリス内部における潤滑油の役割を果たす。オイルの摂取は口から行うため、「喉が渴いた」等という人間臭い表現が為されるらしい。購入時に付属するマニュアルにも記載があるが、「喉が渴いた」は「潤滑油

の残量が残り少ない」と読み替えなければならない。まあその表現をオーナーが理解しなければ、アリスは自分で説明を行うことができるわけだが。

「おまたせっ」

プラスチックのボトルを抱えたアリサが、勢い込んで戻ってきた。ボトルから突き出たストロー状のチューブを小さな唇に咥えこみながら、すと右手を差し出す。オレの手のひらに、数枚のコインが乗せられた。

「札は？」

尋ねれば、不思議そうに小首を傾げる。

「いくらだった？」

「9480円」

自分のこめかみが、ぴきりと音を立てたような気がした。よりにもよって一番高価なヤツを買いやがった。いや、間違いなく故意犯だな。

「工房に戻ったら徴収するからな」

痛い出費だが、後で請求すれば何の問題もない。だがアリサは首を振る。

「わたしそんなに持ってないよ。お財布、2000円くらいしか入ってなかったもん」

「……」

もう諦めよう。無言でハンドルを握る。とつとアトリエに行かなければ。

「身体で払うよ、身体で」

音を立ててオイルを吸い込みながら、けらけらと笑う。

「働いてくれるのか？」

肯定されても、あまり期待は持てないが。アリサはまた首を振ると、少しイタズラっぽい顔つきで、ワンピースの裾をちらりとめくって見せた。白く細い太股が、尻近くまで露になる。期待してるくせにーなどと嘯く。

「調子に乗るなロボ」

「ロボって言うなっ」

くだらないやりとりで時間を費やす内に、目的地に到着した。オレの工房より一回り大きい、洒落た外観の建物。「Atelier HIBINO」の看板が外壁に見える。3台ある駐車スペースの一番奥に停車すると、エンジンを切った。オイルを飲むことに夢中になっているアリサを追い出し、オレも車を降りる。アトリエを見上げた。

―Chapter. 1 アリサ 〔4〕 (後書き)

序盤も序盤ですが、読んでくださった方、続きを読もうと思っ
てくださった方、ありがとうございます。

次回投稿10月30日(日) 予定です。

Chapter. 1 アリサ 【5】

ヨーロッパアンスタイルのやや古風な建物には全体に流麗な装飾がなされ、さながら小さな宮殿のようだ。2階に見えるガラス張りの温室が目を引くが、あれは経営者の趣味だろう。入り口に近づく、木製の自動ドアが左右に開いた。来客を告げるオルゴールの音色が控えめに響く。

「いらっしやいませ。……あら冬治さん」

受付のカウンターに座っていた女性がオレの姿を目に止め、一瞬驚いたような顔になる。すぐに笑顔を見せてくれた。

「美優ちゃん久しぶり。孝一のやつは？」

「いますよ。ちよつと待ってくださいね」

カウンターに乗せられた旧式のベルが、細い指先に鳴らされる。目的の人物は2階にいるようだ。すぐに降りてくるだろう。

「今日はどうしたんです？冬治さんの方からいらっしやるなんて、驚きました」

言って、オレの背後からきよろきよろと辺りを見回しているアリサに目を止める。声を出さず、唇を動かした。「冬治さんの？」そう聞いているようだ。首を振って否定する。

「ほらアリサ、挨拶しろ」

促すと、アリサはおずおずと前にでる。

「このアトリエの主人、孝一って言うんだけど、オレの知り合いでな。で、こちらは奥さんの美優さんだ」

「はじめましてアリサちゃん。日比野美優と言います。よろしくね」
少しかがみこむようにして、アリサの顔を除きこんだ。美優は女性としては背の高いほうだ。アリサとは10センチ程度身長差があるように見える。はねっかえりがきちんと対応できるか不安だったが、予想に反してアリサは丁寧な頭を下げた。

「アリスTタイプ3200、アリサです。よろしくお願いします」

美優が微笑んで応じる。

「クライアントのアリスでさ。丁度調律が終わったところなんだ。メイクと髪型のサンプルが採りたくてね」

「あら。それも依頼として受けられたんです？」

「まさか。時間が空いたからね。オーナーさんが調律後にアトリエを使うようなこと言ってたからさ、サンプルだけでもいくつか提示してやろうかと思ってね」

元村から調律依頼を受けた際に、相談された内容を思い出す。僅かだがアリスの外見を変更したいらしく、その場合どうするべきかというものだった。何をどのように変えたいか、元村がご丁寧に説明してくれたので、CGで作成する変更後のサンプル画像を、アリスの引き取り時に渡してやろうと思ったわけだ。本来不要なサービスだが、アリスに対する調律に元村がケチをつけてくる可能性が多少ながらも懸念されたので、それを封じる狙いがある。

アトリエは、調律工房と同時期に生まれたアリスオーナーを客とする施設だ。調律工房がアリスの内面の改修を担当するのに対し、アトリエは外面の変更を業務とする。髪型や瞳の濃紺といった些細なものから、顔の造作や体型等、人間で言うところの整形手術に相当する大掛かりな変更まで幅広く請け負う。アリスの外貌は、購入時に各パーツ毎に好みのものを選ぶことが可能であり、その選択肢は組み合わせにして数万種類に及ぶ。自らの好みにあった容姿を持つアリスをパートナーとすることができるわけだが、とはいえ飽きはどうやっても訪れるもの。容貌の変更が可能とあれば関心を引かれるオーナーは多く、アトリエは商売として十二分に成立し得る状態にあるのだ。

「なんだ美優、いたのか」

階段を下る足音が響き、大柄な影が受け付け前に姿を現した。

「冬治さんがいらしてるのよ。可愛い子連れて」

「可愛い子？」

アリスの肩に手を置き、二階から降りてきた男の前にそっと押し出

す。男の目が僅かに見開かれた。

「朝倉、お前アリスを買ったのか？」

大柄な体躯と、それに比しても大きな顔が目を引き髭面の男性。このアトリエの主人だ。

「いや、クライアントのアリスだよ。今日はちょっと頼みがあつてな。ほら、アリサ」

少女の背をもう一度軽く押し、先ほどと同じように挨拶を促す。美優に対してと同様、アリサは丁寧に頭を下げた。

「お、礼儀正しい子だね」

豪快な笑みを浮かべ、孝一はかがみこんで応じた。

「日比野孝一です。こいつとは古い付き合いだね。今日は来てくれてありがとう」

髭面の強面だが、笑うと妙に人懐っこい顔になる。アリサは笑顔で、いえ、お世話になります、と返した。恐らくは先刻のやりとりで、美優と共に孝一の印象値は高めに設定されたはずだ。

「さて、朝倉」

立ち上がって俺に目を向けると、孝一は右手を上げ、太い親指で階段を指し示した。

「詳しい話を聞こうか。上に行こう」

「ああ、悪いな。アリサ、お前はここで待っていてくれ」

孝一の背に続き階段に足を掛け、向き直って少女に告げた。

「はい、先生」

可愛い笑みを浮かべて答える少女の外面に辟易しながら、二階へと上がる。散らかり放題の研究室の中ほど、シンプルな応接セツトに案内された。

「まあ座れ」

促され、ソファに腰を沈める。ここへ来るのは数ヶ月振りか。来るたびに研究室には物が増え、雑多な気配も増していくように思う。

「お前、いつもここで客と話してるのか？」

テーブルを挟んで向かいに座った孝一に呆れ果てて問いかければ、

いやいやと、毛むくじゃらの手を振って答える。

「いつもは下だよ。綺麗な応接セットがあっただろう。オシャレなやつが。まあ買ったのは女房だが」

「ああ、そういえばあったな。お前には選べないセンスのいいやつが」

苦笑して答える。孝一との付き合いは長い。ある程度の軽口は挨拶代わりのようなものだ。

「で、今日はどうした。アリス連れて来るなんて初めてだろう？」

「ああ。まあちよつとな……」

簡単に事情を説明する。得心がいったのか、孝一は大きく頷いてみせた。

「それじゃ、とりあえずサンプルを撮ってみるか。連れてきてくれ。ああ、型番はなんだったっけ？」

「Tの3200だ」

髭面が軽く頷くのを確認し、一階へ戻る。先刻話題に出た応接セットで、アリスは美優と談笑していた。手元にボトルは無い。飲み終わったらしい。

「アリス、来い」

呼ぶと、美優に一礼してから駆け寄ってきた。微かに引きつったオレの表情に気づいたらしく、妙に顔を寄せ、何よ、と唇を尖らせる。

「いや、大した狸だと思ってな」

「たぬき？」

声をひそめて告げてやれば、忙しなく辺りを見回す。この表現は通じなかったようだ。

「ほら、あがるぞ」

手を引き、振り払われ。階段を上った。

一Chapter. 1 アリサ 【5】（後書き）

予定より早めで。

次回投稿10月30日（日）予定です。

Chapter. 1 アリサ【6】

「さて、こんなものかな・・・」

研究室の隅に設置されている大型端末から、孝一が1枚のメモリカードを抜き出す。続いて端末上部に接続されている台形の投影装置を取り外すと、応接ソファに腰掛けるオレの所へ、それらを小脇に抱えて持ってきた。

「サンプルを3パターン作った。確認してくれ」

オレの向かいに腰掛けながらそう言い、装置のスロットにメモリカードを差し込んだ。投影装置は読み込ませた3D画像情報をホログラフィーを使用して中空に投影するもので、物体光による立体表示が可能であるため、外面改修後のサンプルを確認するには最適な媒体だ。数年前に開発された新手法によって空気中の窒素に干渉するため、旧時代の同技術と異なり特殊な感光媒体も不要となっている。要はどんな場所においても、実物と見紛うほどの立体画像が表示できるわけだ。メモリを読み込んだ装置が自動的に起動する。

「そりゃいいんだが、あいつはあのままか？」

端末横の簡素なベッドには、顔全体をメカニカルなスキャナに覆われた状態で、アリサが横になっている。

「先生、わたしも見たいですう」

スキャナの中から、くぐもった声。猫かぶりは順調なようだ。

「おお、そうだそうだ。忘れてた」

立ち上がってベッドへ向かおうとする孝一を手で制し、オレは投影装置に視線を投げた。

「いや、やっぱり放っておこう。それよりコレ、どうやって見ればいいんだ？」

「おいっ」

冷たく言い放てば、ベッドから鋭い声が飛ぶ。思わず、という奴だ

ろう。続いて小さく「やばっ」と聞こえたのはご愛敬だ。

「なるほどね」

苦笑し、アリサの元へ向かう孝一。スキヤナの電源を切った。

「すみません日比野先生。ありがとうございます」

スキヤナと天井とを繋ぐ金属製のアームが畳まれ、機械の仮面がゆっくりと上昇する。解放された姫君は笑顔で、孝一に礼を述べた。

「もう、朝倉先生っ」

オレの所へとことこと歩いてくると、笑みを浮かべたまま恥ずかしそうに言う。

「意地悪しないでくださいよお。思わずつつこんじゃったじゃないですか。わたしらしくもなく。ねえ、わたしらしくもなく」

妙なところを強調し、稚拙ないいわけに奮闘する。ふらりとどこかへ行ってしまったらしい猫を被りなおすのに必死だ。

「手遅れだろ。完全に」

言えば、何のことですかあと、可愛らしく小首を傾げて応戦する。アリサわかんないといった風体だ。自分で調律しておいてこう言うのも何だが、もしかしてこの娘は馬鹿なんじゃないだろうか。

「孝一」

アリサを無視し、失笑を携えて戻ってきた孝一に呼びかける。テーブルに乗せられている投影装置を指し示した。

「早く確認したい。操作してくれ」

オレの調律工房にも投影装置は設置してある。だがそれは二世代程前の商品で、目の前のそれとは操作方法が大きく異なる。こいつは最新型だろう。

「じゃあ、まずは一つ目だ」

アリサがオレの横に腰掛けるのを待ってから、孝一の指が装置下部の液晶画面に触れた。鈍い駆動音が響き、装置上方の中空にアリサの姿が投影される。

「今回は顔だけの整形だから、身体は撮ってない」

念のためか、孝一がオレとアリサに断りを入れる。確かに表示され

た立体画像はアリサの胸から上だけのものだ。眼前のホログラムはフルカラーだが、仮に白一色に染めたのなら良くある石膏の胸像に見えるだろう。

「こいつは目尻を1ミリ伸ばして、二重の幅を0.5ミリ広げた場合のサンプルだ。他は変えていない」

説明し、どうだ、と言うように髭面が此方を見やる。答えあぐねて投影装置の立体画像と隣に座る本物のアリサを見比べるが、はつきり言って全く違いが分からない。

「変わったようには思えん」

孝一は笑い、アリサを手招きする。中空の立体画像の隣に、少女の顔が並んだ。テーブルに手を着き顔を突き出すようにして、中々滑稽だ。

「どうだ？こうして見比べてみるとホログラムの方がやや、目が大きいように感じないか？」

「ああ、そうだな。そうかもしれん」

変わらず違いは分からなかったが、面倒なので適当に答えることにした。そもそもオレがどう感じどう認めたところで、アリサの外面の違いを評価するのはオーナーの元村だ。オレとしてはただ、お客様のためにアトリエに足を運んで外面改修のサンプルを取りましたよ、という事実が提示できればそれでいい。

「よし。じゃあ二つ目だ」

満足したのか、孝一の指が再度液晶画面に伸びた。

一 Chapter. 1 アリサ 【6】 (後書き)

明日投稿予定でしたが、仕事が入ったので1日早めました。なので
ちよつと短めです。

次回投稿、11月3日(水) 予定です。

Chapter. 1 アリサ [7]

「目尻を1.5ミリ、二重の幅を2ミリ伸ばしてある。最後がこれ、目尻を2ミリ、二重の幅を2.2ミリだ。最後のはかなり大きく変えているから、自然な目元にするためにアイラインを濃く引いてある」

なるほど。三番目のサンプルはさすがに、今のアリサと大きく印象が異なる。

「素晴らしいです、日比野先生」

笑顔で告げるアリサ。その表情は薄っぺらな外面か、あるいは本心からのものか。

「どうだ？問題なければ、このサンプルを持ち帰ってもらおうが」

「ああ、これでいい。ありがとう孝一」

礼を言い、投影装置からエジェクトされたメモリカードを受け取る。再度オレの隣に腰掛けようとするアリサを手で制すと、ソファから立ち上がった。

「もう帰るのか？」

「ああ。助かったよ。アリサ、行くぞ」

少女を促し、一階へ向かう。階段の最上段に足を掛けた辺りで前を行く小さな背中が立ち止まり、振り返って孝一に深々と頭を下げた。

「日比野先生、どうもありがとうございました。旦那様に、絶対に日比野先生のアトリエをお使いいただくよう、お伝えしておきます」

「うん、よろしく頼むよ」

笑顔の孝一を二階に残して別れ、入り口のカウンターで美優にも別れを告げると、アリサと連れ立ってアトリエを出た。車に乗り込み、一息つく。

「ねえ」

シートベルトを身体に回しながら、アリサが口を開いた。

「ありがとね。ソレ」

トラッカージャケットの胸ポケットに放り込まれたメモリカードを細い顎で示し、礼を述べる。

「ああ、まあ時間が余ったからな」

お前のオーナーが調律結果にケチをつけてきそうだから、追加のサービスで印象を良くしておきたいだけだ、とはさすがに言い辛い。

「シートベルトは締めたか？出すぞ？」

シフトレバーを握り、アクセルペダルをゆっくりと踏み込んだ。

「ちょっと聞きたいんだけどさ……」

ジャンクショップの前に差し掛かった辺りで、暫く静かにしていたアリサが声を掛けてきた。黙って続きを促すと、ぽつぽつと話し始める。深刻な話なら、あまり聞きたくないのだが。

「わたしさっき、日比野先生のアトリエで寝てたとき、間違えたじゃない？」

「間違えた？」

オレの横顔を見つめ、大きく頷く。

「アンタが変なこと言ったとき、てゆうかアンタが変なこと言うのが悪いんだけど、つつい厳しくつつこんじゃないでしょ？」

「おいってやつか？」

話の方向と、答えるべき内容は見えてきた。少女は不安そうな眼差しで、再度頷いてみせる。

「あんな風に言うつもり無かったのに。他の人の前ではちゃんと、素直で礼儀正しい子でいなくちゃいけないのに。それなのに、間違えたよ」

「要はだ」

アリサの台詞を遮るようにして、まともに掛かる。

「オレが調律ミスをしたんじゃないかと、そう言いたいわけだな？」
ハンドルを回し右折する。少し黙った後、アリサはこくりと顎を引く。

「だってそうじゃん。人間なら兎も角、わたしアリスだよ？人格プログラムのはあんまり知らないけど、明確な行動分岐があるん

でしょ？間違えるなんて変じゃん」

「なるほどな」

言いたいことは分かるが、自分で言うように、人格プログラムに対する知識は浅いようだ。間違えることがあるか否か等、それこそ人格プログラム次第だ。

「乱数だよ」

少し細かい話になるぞ、と前置きした上で、そう告げる。

「お前はオーナーを筆頭にした特別親しい人間以外の人物がその場にいると、基本的に猫をかぶろうとする。そういう風にプログラムを組んである」

「うん……」

「だが、猫をかぶるような言動をお前の中のプログラムが選択した際、最後に一つ処理が加わるようになっていく。具体的には、1から100までの乱数を取得する」

「乱数を取得……」

わかってなさそうだ。

「1から100までの数字の中から、ランダムに一つを取得する。取得した数値をaFineBugという変数に保持し、その変数を定数7で除算した余りを、aFineBugに挿入する。最後にaFineBugに対して判定を掛け、値が0の時に限って、先に取得した行動論理定数のリストを廃棄し……」

「ちょっと待った」

割って入られた。少女は訝しげな目でオレを見つめてくる。一つため息を吐くと

「つまりだ」

言い直すことにした。

「お前が猫をかぶろうとした際に、最小1から最大100の値を一つ取得し、その数値が7の倍数だったときに限り、お前は猫かぶりに失敗、つまりボロを出すわけだ」

「は？」

アリサの声が車内に大きく響く。僅かに怒気を含んでいるように感じる。

「1から100までに、7の倍数はいくつある？」

「14個」

即答だ。さすがにこういう計算は速い。

「つまり100分の14の確率で、お前は猫をかぶることに失敗するわけだ。一つ一つの言動に対して100分の14だから、猫をかぶらなければならない状況が長時間続いた場合、お前が最後まで素直ない子を演じきれぬ確率はまあ、天文学的なものになる」

「……」

アリサが助手席で俯く。一瞬、啞然とした表情が見て取れた。念のため付け足す。

「一応言っておくが、こいつもお前のオーナーの要望だぞ」

意図は知らないが。

「ま、気を落とすな。ちょっとアレな要望に思えるかもしれないが、オーナーは喜んでくれるさ」

しぶしぶといった様子で頷いてみせるアリサの姿を横目で確認する。アクセルペダルを強く踏み込み、スピードを上げた。

Chapter. 1 アリサ 【7】（後書き）

基本的に告知した投稿予定日より早め早めに上げていこうと思っています。

次回投稿予定、11月4日（金）予定です。

—Chapter. 1 アリサ【8】

スリープモードにしたアリサを研究室のベッドに寝かせると、自室のソファへ。仕事中、入浴中、食事中。それらの時間を除けば、ここがオレの定位置だ。コーヒーマーカーから取り出したばかりのマグに注がれた茶褐色の液体を口に含み、時間を掛けて飲み込む。脱ぎ際にジャケットの胸ポケットから取り出したメモリカードを左手で弄びながら、隣室の少女に想いを馳せた。落ち込んでいたようだが、大丈夫だろうか。言いようによっては不完全な人格プログラムを挿入されたのが、どうにもショックだったようだ。

「旦那様が、そうしたいって言ったんだよね？」

研究室に戻りスリープダウンする直前、少女から念入りに確認された。オナーの望みは絶対のもの。それは人格プログラムの、アリスの行動理念の根幹。だが目の前に元村がいらない以上、不安は拭いきれないのだろう。

「困ったもんだな……」

一人語ちながら、虚空に視線を彷徨わせる。アリサにはただ、元村からそう依頼されたのだから大丈夫だと、それしか言えなかった。いや、言わなかった。彼の調律意図が読めない以上、アリサへのオレの言葉は何ら説得力を持たないからだ。

「さて……」

眩き、空になったマグを片手にソファから立ち上がる。あまり考えていても埒もない。オレはただ、依頼された仕事をこなすだけ。こんなことは、そう、大した問題じゃない。

壁に掛けられたデジタル時計に目をやる。15時35分。アトリエに向かうために工房を出たのは、確か11時頃ではなかったか。思ったよりも時間を食った。そういえば腹の虫も鳴っている。ふと思ひ至り、研究室に再度足を踏み入れた。

「アリサ、ReBootだ」

ベッドへ近づき、眠り姫に声を掛ける。目覚めはキスで、といかないところがつまらない。いや、それは白雪姫だったか。童話には疎い。

「おはよ。どうしたの？」

目覚めたアリスが、半身を起こしてオレを見上げる。今回は大人しい。先刻のやり取りを引きずっているのだろうか。

「腹が減った。飯を食いに出ようと思うんだが、お前も来るか？」

言えば、意外な言葉を聞いたとばかりに大きな瞳をぱちくりとさせる。

「わたしアリスだよ？ご飯とか食べないよ？」

「そりゃ分かっているよ。お前を置いて勝手に出かけるのもどうかと思っただけだ」

オレが戻ってくるまで、工房で待っているというのならそれはそれでいい。来るかと聞いたのは社交辞令のようなものだが、オレとアリスの関係性を考えれば、確かにそれも妙な話だったかもしれない。

「アンタさ、変に律儀だよね」

妙なことを言い、少女はベッドから飛び降りた。

「スリープモードにしておけば、アンタがどこ行こうが何してようが、わたし気づかないのに」

どこか澄ましたような表情で、アリスはオレを見つめる。初めてみる表情だからだろうか。まっすぐな視線に気おされる。

「何か、つくったげようか？」

真顔でそう続け、少女はつと視線を逸らした。行きたいお店があるなら別だけど、とも付け加える。

「いいのか？」

意外な申し出だったが、正直ありがたい。アトリエから戻ってきて大して時間も経っていない。またすぐ外出するのが億劫だったのは確かだ。こいつの作る料理にも興味がある。アリスが頷くのを確認すると、礼を言ってキッチンへ案内した。

「改めて見るとさ、狭いよね」

自室隅のキッチンを凝視しながら、また生意気を口にする。あまり自炊をしないオレは不自由を感じないが、世間一般に見れば適当な感想なのかもしれない。キッチンの隅で、洗浄機がこぼこぼと音を立てている。洗われているのは先ほど使っていたマグだ。

「何食べたい？」

屈みこんで小型のフリーザをのぞき見ながら、アリサが背中越しに問う。定位置のソファにゆっくりと腰掛けてから、少し考え、答えた。

「十五番街産天然牛のサーロインステーキ。フォアグラ乗せ」

「オツケー、パスタね」

暫しの沈黙。アリサが手際よく準備を進める音だけが8畳の洋室に響く。慎重に考えを巡らせてから、思い切って口を開いた。

「アリサ、オレはもしかしたら、調律ミスをしたかもしれん」

「いや、五月蠅いし」

にべも無い。煩わしそうに振り返り、少女はオレをねめつける。

「パスタ、ハム、ウイスキー、調味料各種。以上、アンタの食材のストック」

フリーザから一つ一つ取り出して見せ、大げさにため息。怒気を孕んだ、ねっとりとした視線を投げつけてきた。

「オレが悪かった。乏しい食材で済まないが、宜しく頼む」

さすがに観念し、そう告げた。眼を閉じ、すこしまどろむ。アリサは当然飯は食わない。オレのためだけに作ってくれているのだから、あまり邪魔をしてもよくないだろう。眠気に襲われながら、しかし寝て待つのも無礼だろうと葛藤していると、向こうから声を掛けられた。

「てかさ、ご飯つくってあげるの、初めてだよね」

こちらに背中を向けたまま、手元だけ忙しく動かしながら、何だか殊勝なことを口にする。

「そうだな。だが別におかしなことじゃないだろう」

アリサはオーナーに対してこそ尽くすもの。ましてやオレは、アリ

サのオーナーから金をもらって彼女を預かり、調律を行っている人間だ。逆ならまだしも、アリサがオレに尽くす道理は何も無い。

「そうかもしれないけどさ。でも、一生懸命調律してくれてたし、ご飯くらい、ちゃんと作ってあげればよかったなって。ごめんね」

「仕事でやってるんだ。気にするな」

言いながら、アリサにインストールした人格プログラムのソースコードを思い浮かべる。今の彼女の発言は、少々予想外だった。アリサの行動倫理に即しているだろうか。霞掛かっていた脳内に急速に光が戻る。熟考し、バグというほどではないと結論付けた。

「できたよっ」

甲高い声で叫ぶようにそう言い、アリサが此方を振り返った。オレはソファから立ち上がり、洋室中央の小テーブルに向かう。チェアを引き腰掛けると同時に、目の前に湯気の立つ皿が置かれた。芳ばしい香りが鼻腔を攪り、触発されてか、小さく腹が鳴った。

「旨そうだな」

正直な感想を口にすると、少女は大仰に頷いてみせる。クリーミーな白いスープの中央に、形良く盛られたパスタが顔を出している。強火で焼かれたのか、ベーコンにも見えるハムが細かく刻まれてその上に。薄く振りかけられたブラックペッパーが食欲をそそる。

「ミルクスープパスタだよ。食材が少なくてさ、色々代用しちゃったから、ちょっとあっさり気味かも」

簡単に説明し、自分で味見できないのがキツイ、等と呟く。

「いや、本当に旨そうだ。さすがだな、アリサ」

10日間の調律作業中は、常時ソースコードの羅列に頭を支配されていた。食事に時間を掛ける気にはどうにもなれず、アリサのスリップ中にインスタント食品をかき込むばかりの生活だった。久々の真つ当な食事を前に、図らずも多量の唾液が沸いてくる。

「はい、どうぞ」

小さな手が、皿の隣にマグを配置する。コーヒーも入れてくれたらしい。本日3杯目だが、コーヒー党のオレにはやはり嬉しいもてな

しだ。

「いただきます」

調理者の手前、そう口にしてからフォークを取る。オレの代わりにソファに腰掛けたアリサは、そわそわと周囲を見回している。

「うん、旨い」

茹ですぎることなく、程よく芯の残ったパスタに濃厚なミルクスープが絡みつくその一品は極めて美味。アリスという商品のポテンシャルを改めて実感させられる。「子宝に恵まれなかった夫婦の究極的な癒しとして、あるいは、永続的に稼働し続ける最強の家事手伝い、ベビーシッターとして」。Physical Illusion社の語るアリスの存在意義。性処理目的に使われるアリスが一定数存在する以上唾棄すべき妄言には違いないが、あながち的外れでもないのだろうか。癒しであり、性玩具であり、一種のツールであり、オレの生活の糧でもある。アリスとは、アリスとは一体、何なのだろう。

「旨いぞ、アリサ」

落ち着かない素振りは、味に対する評価を気にしてのことだろう。ソファの少女に、改めて感想を伝える。途端に、表情が華やいだ。よかった、と嬉しそうに呟く。

「へえ……」

その表情に、思わず見入ってしまった。膨れっ面。何かを穿ったような目付き。怒気を孕んでつり上がった眉。体面を取り繕っただけの薄っぺらな笑顔。そんな顔ばかり見てきたからだろう。不意に見せられた純粹な笑顔は、途方も無く新鮮だった。

「何よっ」

自らの顔に張り付いたオレの視線に気づき、またすぐいつもの表情に戻る。残念だ。もう少し見ていたい気分だったのに。

「何でもねえよ」

テーブルに視線を戻し、そう答えてから食事に集中する。アリサを現在の性格に改修しようとした元村の意図は変わらず不明なれど、

あの一瞬の笑顔は悪くない。どこか暖かな気持ちになって、横目でちらりと少女を覗き見た。不機嫌そうに眉を顰めたその顔に、一瞬前の笑顔をそっと重ねる。うん。確かに、悪くない。

—Chapter. 1 アリサ【8】（後書き）

次回投稿、11月4日（金）予定です。

Chapter. 1 アリサ【9】

「ねえ……」

食事を終え、自室のソファで再びまどろんでいると、アリサに声を掛けられた。閉じかけていた瞼を気力でもって開き、窓際で手招きする少女を見やる。

「どうした？」

立ち上がるのが億劫で、ソファの背もたれに身を預けたまま答える。想定外にだらしの無い声が出た。

「あれ、見て」

動こうとしないオレに苛立ちを見せながらも、少女はしつこく手招きする。ほっそりとした指先が、窓の向こうをしきりに指し示す。

「ああ、珍しいな。驚いたよ」

適当にそう答え、ソファからは断固として動かずに少女に背を向ける。眼を閉じると一層に強い睡魔が襲ってきた。アリサが何を見つけたのかは知らないが、猫だの犬だの、どうせそんなところだろう。今この睡眠欲を満たすことの重要性が、お前には分からないのか。

「ちよつとっ。ちゃんと見てよ」

「見たよ。珍しい模様だな」

「何の話してんのよ。ちゃんと見ろっ」

怒りのボルテージが最高潮に達したらしい少女が、怒鳴るように言う。煩わしいことこの上ない。仕方なく身を起こし、軽く伸びをする。窓の外とオレとに交互に視線をやりながら、もじもじと身体を震わせて待つアリサの元へ殊更に時間を掛けて向かった。

「ったく。何だっただよ」

小さな手に促されるままに、窓越しに外を覗き込む。もうすっきり夜だ。デジタル時計に眼をやれば、19時を回っている。

「あれ、Floatじゃない？」

耳元で少女の囁き。くすぐったい。

「Float？」

自室の窓から見えるのは、工房の周りを取り囲む低い塀。暗がりに眼を凝らせば、その向こうに小さな影が揺れている。

「みたいだな」

捲り上げていたカッターシャツの袖を下ろし、自室を出て玄関へ向かう。外へ出て、先刻揺れる影を見かけた裏路地へ。しかし動くものは確認できない。住宅街に位置する工房周辺は、夜の帳が下りると共に奇妙に静まり返る。今現在も同様、虫の声だけが暗がりに響いている。ふいに、窓ガラスを叩く音が聞こえた。

「何だよ」

振り返り、打音の発生源である窓向こうのアリサをねめつける。小さな口と手をしきりに動かし、向かって右方向を強調している。そっちへ行ったということか。

「面倒くさい」

語ちながらもアリサの指し示した方向へ歩みを進める。道なりに一つ角を曲がると、前方にふらふらと揺れる影。長い頭髪を後頭部で乱雑に纏めた、ティーシャツにホットパンツの少女だ。

「君……」

小走りで小柄な背に追いつき、肩に手を掛けて呼び止める。少女は別段驚くこともなく、ゆっくりと振り返った。見えているのかいないのか、空ろな瞳が、オレの姿を蒙昧に捉える。

「型番は？」

できる限り穏やかな口調を心がけ、少女に尋ねる。見知らぬ男に、背後から唐突に肩を掴まれた際の落ち着いた反応からも明らか。この子はアリサだ。

「Cタイプ2205です。先生……」

「先生……？」

耳慣れた呼称を口にされ、少々驚く。C2205。アリサと同じ、コモンタイプのアリサだ。先生の呼称は何かの勘違いか、あるいはオレが調律師であることを知っていたのか。少女の顔を、弱弱

しい表情を凝視し、思い至った。

「君は確か……」

以前、それも1年以上前、オレの工房にいたアリスではなかったか。オーナーの要望で、反吐の出るような調律を施してやった、哀れな性玩具。そういうえば型番にも覚えがあるような気がする。名前は確か「キリカです」

様子を察してか、そう名乗った。それですっかり思い出す。しかしこんな時間、こんな場所を一人でうろついているということは。

「思い出したよ、キリカ。とりあえず、工房においで」

屈みこみ、ほっそりとした手首を取る。優しくそう誘うと、今にも泣き出しそうなほど、表情が歪んだ。

「よろしいんですか……？」

アリスは泣かない。涙を流す機能など実装されていない。それでも、この表情には胸が痛む。少女の問いには答えずに立ち上がり、その背にそっと右手を回した。続いて左手を揃えさせた膝の裏へ。優しく抱き上げる。

「すみません、先生」

弱弱しく呟くが、抵抗はしない。いや、できないと言ったほうが正確か。暗がりに慎重に足を進め、工房へ向かう。

「一年ぶりだな」

そう声を掛ければ、腕の中で小さく頷く。彼女は当時と、何も変わっていないようだ。どこか儚げな仕草も、このアリスとしては異常な程の低体重も。

キリカは軽い。身長はアリサと変わらないにも関わらず、50キロ少々 of 重量しかない。アリサの重量が恐らくは70キロ台半ば、標準的なアリスの体重であるとする、やはり相当に軽い。理由は簡単で、大掛かりな外面改修を施し、部品を抜いてあるのだ。アリスが活動する上で最低限必要なパーツだけを残し、その他の補助パーツを破棄している。故にキリカの運動性能は、一般のアリスに比べ著しく低い。ではなぜ彼女はそんな改修を施されているのか。決

まってる。オーナーがただのクソ野郎だからだ。

工房の玄関ドアに辿りつく。窓からオレが戻ってくるのを見ていたらしく、アリサがドアを開けてくれた。キリカを抱いたまま研究室に入り、ベッドに身体を横たえさせる。デスクからアリサにマシーナリーオイルを持ってこさせ、小さな声で礼を言う少女に手渡した。キリカの運動性能は確かに低いが、まともに歩くこともできない程ではない。裏路地でふらついていたのは、単にオイル切れを起こしていたからだ。

「事情は後で聞く。オイルが身体に行き渡るまで、少し休むといい」
キリカが十分な量のオイルを摂取するまで少し待ち、そう声を掛けた。

「キリカ、Sleep Downだ」

部屋の電気を消した。

—Chapter. 1 アリサ【9】（後書き）

次回投稿、11月5日（土）予定です。

Chapter. 1 アリサ 【10】

F l o a t A L I C E。何らかの事情でオーナーを失うこととなったアリサ達は、総称してそのように呼ばれる。尽くすべき相手の存在と共に、自らが稼動する意義と居場所をも失くした哀れな機巧人形。躯体に大きな損傷さえなければ、ほぼ永続的に稼動し続けることができるアリサ故に陥る、悲惨な状態の一つだ。通常アリサのオーナーは、自らがアリサを見守ることができなくなった場合に備えて事前に命令を下しておく。頼るべき相手を教えておいたり、製造元であるPhysical Illusion社に赴き自らの廃棄を申し出るよう伝えておいたり、人によっては、次のオーナーを具体的に指名しておくこともあるらしい。だが全てのアリサが、そうした通達を受け取った上でオーナーを失う訳ではない。不慮の事故や病気で唐突にオーナーを亡くしてしまうアリサもいれば、飽きて疎ましく思ったり、生活の変化により邪魔になったアリサを、それこそゴミくずのように捨ててしまうオーナーもいると聞く。主としてそうした場合に、アリサは今後の行動指針となる指顧を何ら受けぬまま、何もかもを失うのだ。

「アリサ、お手柄だ」

自室のソファに並んで腰掛け、どこか意気消沈した様子の少女に言葉を掛ける。大きめとはいえ本来一人用のソファなので、一緒に座られると少々狭い。身体の落ち着くポジションを探そうと小さな尻をもぞもぞと動かしながら、少女は頷く。狭いと文句を垂れば間髪入れずに強い台詞は吐くものの、声色に混じる沈痛な響きはごまかせていない。

「お前のお陰で、あいつを見つけられた。感謝してるよ」

アリサを元氣付ける意味合いも込めて、素直に謝辞を述べる。偶々だよ、と言口にしてから少し押し黙り俯くと、唐突に顔を上げ、少女はまっすぐにオレの目を見つめてきた。

「知り合いのアリスなんだよね？あの子」

そういえば説明もまだだった。アリスの視線から逃れるように目を閉じると、首を背もたれに預けて天を仰いだ。

「一年前に調律したアリスでな。聞いてたと思うが、名前はキリカだ。お前の予想通り、多分Floaだろうな」

何故オレの工房前にいたのかはわからないが、オイル切れを起こしかけたアリスが、何があるわけでもない場所を夜一人で歩いているのは不自然に過ぎる。キリカのオーナーは、この工房からはそれなりに離れた場所に住んでいたはずだ。一年前は、だが。

「アンタさ、さっきあの子のこと、抱っこしてたよね？」

質問が続く。アリスなりに、思うところがあるのだろう。

「それがどうかしたか？してほしければお前のことも抱き上げてやるぞ」

「そうじゃなくて……」

茶化したつもりが、真剣な口調で返された。おそらくキリカの特異な身体構造のことに気づいているのだろう。

「わたしたち、結構重いじゃん？アンタあんまり力あるように見えないし、何か軽々と抱き上げてたように見えたり、だから、何ていうか……」

らしくない。随分と遠まわしな言い方だ。目を閉じたまま答える。

「補助パーツを一切合財抜かれてる。体重はお前の三分の二だ」

「何で？」

間をおかず、オレの台詞に被せるようにアリスが問う。あまりこの娘としたい話でもない。強制的にスリープダウンさせてしまおうかと、一瞬乱暴な考えが頭を過ぎった。話すべきか否か。知らないと答えてしまえば互いに楽だったのかもしれないが、少女の意な声色がそれを許さなかった。腹を決めて口を開く。

「お前、オーナーとの性交渉は？」

元村の名誉もある。例えそうした行為があったとして正直に答えるかは分らないが、回答はどちらでも良い。ただの話の取っ掛かり

だ。アリサが怒る可能性も予想したが、少女は冷静に首を振った。

「ないよ。旦那様は、わたしにそんなことは絶対に求めない」

静かだがはっきりとした物言いに、少々意外な思いがした。嘘をついているように感じないが、とはいえ人間とは違う。アリスの口にする嘘など、見破れる自信はない。

「キリカは……」

言いかけて、ふと思う。キリカは本当にFloatか。状況を鑑みれば、そうでない可能性はほぼないだろうが、本人に確認が取れていない以上、やはり断定はできない。となればここから先は、キリカのオーナーのプライバシーに他ならない。アリサが聞いたことをペラペラと口外して回るとは思えないし、キリカのオーナーの恥部がどれだけ世間に漏れようが知ったことではないのだが、仮にそうなった場合、傷つくのはあくまでキリカなのだ。

「すまんアリサ。後で本人に確認をとってから、改めて話させてくれ」

ため息混じりにそう告げた。こうなると、先ほどの問いをアリサが否定してくれたのがあるがたい。肯定されていたら、わたしは話したのに、と成りかねないところだった。

「済まない。それでいいか？」

再度尋ねると、小さくうんと答えた。

「てか、わたしこそごめんね。無遠慮な質問して」

「いいさ。中途半端に済まないな」

閉じていた瞼を上げ、時刻を確認する。20時15分。キリカはオイルが足りなくなった状態で、それなりに長時間活動していたものと思われる。全身にオイルが行き渡るまでには、もう暫く掛かりそうだ。

「二時間したら起こしてくれ」

アリサにそう頼み、もう一度目を閉じた。隣でもぞもぞと動く小さな身体。やはり狭い。

一Chapter. 1 アリサ【10】（後書き）

次回投稿、10月6日（日）予定です。

—Chapter. 1 アリサ 【11】

「どうだ？身体の調子は」

研究室の向かい、キッチンのある自室と横並びになったベッドルームにて、目覚めたキリカに話しかける。研究室はゴチャついており、自室では椅子が足りないため、この部屋へ移動した。先の二部屋にこの寝室、それに浴室と玄関を加えたものが、オレの工房の全てだ。ちなみにアリサが同席するとさえ言い出さなければ、どの部屋でもスペースは足りた。相変わらず迷惑な娘だ。

「大丈夫です、先生。ご迷惑をお掛けしました」

悲しそうに眉を顰め、小さな声でキリカが言う。落ち着いた仕草で頭を下げてみせた。

「気にするな。知らない仲でもないんだしな」

それに、迷惑ならまだ掛け終わっていない。現在進行形で絶賛被り中だ。まあ、首を突っ込んだのはオレだが。

「それよりいいのか？邪魔ならどけるぞ」

視線でアリサを示し、キリカに問うた。アリサはオレと並んでベッドに腰掛け、自室の小テーブルから持ってきたチェアに、キリカが座って向かい合っている。

「もう、邪魔かもしれないって思うんならさ、いちいち聞かずにどければいいじゃん」

アリサが妙なことを言って、キリカの足下のダストボックスを部屋の隅へ移動させる。自分のことだと露ほども思っていないらしい。なかなか幸福な思考回路をしている。

アリサの行動に目を丸くしたキリカは、しかし構わないと示すので、そのまま話を続けさせてもらうことにする。

「では、事情を聞かせてもらおうとしよう。率直に聞くがキリカ、お前はFloatか？」

本人に順を追って話させるべきか多少迷ったが、やはりこちらの質

問に答えていってもらう形の方が効率的だと結論づけた。

「はい。一昨日より、オーナーを失った状態となっています」
辛そうに、しかしはつきりとした口調でキリカは答える。

「それは何故だ？」

問えば、目を伏せて押し黙る。数秒して、今度はおずおずと、途切れ途切れに言った。

「旦那様は、一週間ほど前に新しいアリスを買われました。それで、わたしが旦那様の元に居続けると、お邪魔になってしまうということで、その……」

結果的に口ごもる。

「要はだ。邪魔だから消えろと、そう言われたわけだな？」

キリカのオーナーの顔を思い浮かべる。似合いそうな台詞だと、そう思った。キリカは慌てて言葉を繋ぐ。

「いえ、あの、旦那様は確かにそのような内容の発言をされましたが、それは旦那様なりの優しさからであって……」

「どこがだ？」

捨てられてなお吐かれる戯れ言に、苛立ちを覚えて言葉を被せる。キリカを責めるべきではないというのに。

「それは、自分は邪魔なんだとわたし自身が悟ってしまうより、旦那様がはつきりと口にしたほうが、結果的にわたしが傷つかずにすむと、そのようなご判断が旦那様にはきつと……」

「キリカ済まない。ちよつと用事ができてな。Sleep Down してくれ」

唐突にそう言えば、小さく頷き、瘦身の少女はスリープモードに移行する。

「どしたの？」

不思議そうに見つめるアリサを無視し、動かなくなったキリカを抱き上げた。研究室に運び込む。アリサも勝手についてきた。

デスクのプレジデントチェアに腰掛け、調律用の端末を立ち上げる。ただ部屋に居られても邪魔なだけなので、アリサにも手伝わせ

ることにする。

「アリサ、キリカの個体番号を読み上げてくれ」

「何するの？」

訝しみながらも、質問を無視されたアリサは素直にベッドに向かう。寝かされたキリカの口を開き、舌の裏を覗き見た。アリスの個体識別番号は、舌の裏に刻印されている。

「C2205 | 49035562」

「サンキュ」

読み上げられた数字の羅列を端末に打ち込み、キリカの人格プログラムに無線アクセス。設定ファイルを検索し、液晶画面にソースコードを表示した。複雑な英字の羅列が、大量に画面を埋め尽くす。

「ねえ何するの？」

液晶画面を覗き込みながら、アリサが再度問うてくる。

「見てればわかる」

あまり無視し続けるのも不憫になり、そう答えた。回答になっているかは知らない。

設定ファイル内にもう一度検索画面を呼び出し、変数aEmotionalParamOwnerを探し当てる。数秒ほど掛かり、該当の変数がマークアップされた。

「ふざけやがって……」

aEmotionalParamOwner10000。画面に表示された値を見て毒づく。アリサが興味深そうに、画面とオレの顔とを交互に見やる。

「これ何？」

案の定そう訊いてきた。

「キリカの、オーナーに対する印象値だ」

教えてやれば、なるほどお、と大げさに頷く。それにしても、さつきからアリサの仕草の一つ一つが、妙に爛に障る。大分苛立っているようだ。落ち着かなければ。アリサに当たるなど、あってはならない。

マークアップを非表示にし、次の検索値を入力する。a P r o t e c t i o n O w n e r F L G。出てきた `|| true` の表示を、`|| false` に書き換えた。先刻の検索値に戻り、100000の数値を今度は30000に書き換える。

「印象値、下げちゃうの？」

耳元で、不安げなアリスの声。何故お前が不安がる。

「ああ。さっきの聞いたろ？あれじゃ話にならない」

言って、設定ファイルを上書き保存。確かにそうだけど、というアリスの言葉を聞きながら、保存処理が終わるのを待った。通常の調律時には、変更箇所が多数に渡るため端末上で書き換えたソースコードをアリスに再インストールする形をとるが、今はアリス内のソースコードを直接に書き換えている。インストールの手間がないので、時間を食わない。

「アリス、寝室に戻ってろ。すぐに向かう」

少女が研究室を出るのを見届け、大きくため息。妙に疲れてしまった。

「キリカ、Rebootだ」

端末の電源を落とし、立ち上がった。

Chapter. 1 アリサ 【12】

「捨てたんです」

寝室で三人、先ほどの並びを再現し、事情聴取を続ける。

「新しいアリスを買ってきて、飽きたからもういらないって。わたし、旦那様にたくさん尽くしたのに……」

流れることのない涙をまるで堪えるような面持ちで、キリカはぼつぼつと話し続ける。

「旦那様のために、できることは何だってしまった。先生はご存じですけど、わたし補助パーツを全部抜かれてるんです。なんのためだと思います？」

キリカの態度の変化に口を開けて見入っていたアリサが、自分に向けられた問いだと気づきはつとする。

「わ、わかんないよ」

戸惑ったように答えた。これは先ほどアリサがオレに向けた問い。答えを得る機会は存外に早くやってきたようだ。

「わかりませんか？ですよね。だって通常は有り得ない理由ですもの。重いからですって。わたしが上になるときに、重くて疲れるからって……」

「そ、そっか。疲れるのは、良くないよね」

視線をあちらこちらにやる挙動不審な所作の後、アリサが頓珍漢な回答をする。だめだコイツは。意味も分からずにオーナーの肩を持ちやがった。軽く頭を小突くと、悲しそうな眼差しでオレを見上げた。自分が何かを間違えたらしいことは理解しているようだ。

「確かにわたしはアリスです。道具です。でも、それでもやっぱり悲しいです」

「そうだな。お前はよく頑張っていた」

オレは大仰に頷き、キリカに同意を示した。どんなに悲しかろうが辛かろうが、アリスはオーナーには逆らわない。それはそのように

設定されているからであり、またそれ以上に、オーナーの命令に絶対服従することが、アリスとしての矜持でもあるからなのだ。

キリカは、性玩具としての典型的な道筋を辿ったアリスだった。

オーナーに付き従い、身の回りの世話に従事し、望まれればいつだって、笑顔で股を開く。キリカはきつと、オーナーに求められることに喜びを感じてはいただろう。自分に向けられているのが愛情とは異なる感情だと分かってはいても、望まれているのがキリカというアリスではなく、アリスの持つ柔らかな肉感に過ぎないと分かっているにしても、ただオーナーの役に立てることが誇らしくあったことだろう。アリスとはそういうものだ。自らの性欲を発散させるためにアリスを抱くオーナーと、オーナーの腕の中で頬を染め、艶っぽい喘ぎ声を漏らすアリス。客観的に見れば、何とも愚かな茶番劇だ。アリスは痛みを感じない。無論、性的な快楽を感じ取るような機構も実装されていない。キリカは行為のたびに、自身の足の間で腰を振るオーナーの姿を冷静に見定め、どのようにすればより大きな快楽を得ているかのように見えるか熟考したうえで、その小さな口から、無理やりに甲高い喘ぎを搾り出したはずだ。

「それで、どうしてこのあたりをうろついていた？」

オレを尋ねて来たのか。あるいは偶々か。キリカは答える。

「どこにいったって、どうすればいいのか、分からなくて……」

押し黙ったので続きを促す。

「旦那様を除けば、わたし、先生しか知らないのです。旦那様のお家から、基本的に外には出ませんでしたので……」

「えっ、全くでなかったの？」

アリスが尋ねる。キリカは恥じ入るように肯定して見せた。

「それで、ここへ歩いてきたのです。でも先生にお世話になったのは一年も前ですし、わたしのことを覚えてくださっているかも分かりませんし、お尋ねするのもご迷惑かと思って、迷っていたところを、先生にお声がけいただきました」

「迷惑だなんて、そんなことないよ。もう自分の家だと思ってくつ

ろいでもいいんだよっ」

アリサが勝手を言っているのが気にはなるが、兎角状況は知れた。

「先生、わたし、どうなりますか？」

沈痛な面持ちで、キリカはオレに問う。気持ちは分かる。だが、それをオレに委ねるか。

「お前のオーナーと、一度話をしてみてやる。それで駄目なら……」悪いが廃棄処分だ。続けようとした言葉を飲み込む。見上げるアリサの視線が気になったからだ。

寝室に設置された、自室と同型のデジタル時計で時刻を確認する。22時30分。少し遅いが、止むを得ない。

「キリカ、お前のオーナーのフルネームを」

ズボンのポケットから5センチ四方の小型タブレットを取り出し、キリカに問うた。1年前の依頼者の名前など、流石に覚えていない。答えを受け、口元に持っていたタブレットに呟く。

「Search。スズムラチハヤ」

タブレット上部につりつけられたレンズから、検索結果がホログラフィーで中空に投影される。孝一のアトリエで見た投影装置と同様の機構だが、こちらは小型機なのでモノクロだ。

「22名もいるな。漢字は？」

「漢数字の千に、時刻の方の早いで、チハヤです。」

「それでも5名いる。年齢は？」

キリカのオーナーの鈴村千早は38歳。年齢を付け加えて検索すること、ようやくと1名に絞ることができた。

「Access」

呟けば、発音音が響く。タブレットの下端から棒状のマイクをスライドさせて取り出すと、本体は耳元へ持っていた。

「夜分に済みません。調律工房の朝倉と申します。ええ。一年ほど前に調律依頼を頂いた」

話しながら部屋を出ようとする、出口にアリサ。ここで話せと言うことらしい。舌打ちしようとして思い留まる。電話中だった。

「そちら様のキリカさんなんですが、今うちの工房に来ておりました。本人が話したがないもので、事情をお伺いしようかと」

向こうから話させるのが得策と判断し、そのように告げる。鈴村が答えた。

「いや、それは失礼しました。いや私、恥ずかしながら新しいアリスを先日購入しましてね。その子にはP Iの方で廃棄処理を申し出るように伝えたんですが、伝わってなかったのかな。いや、失礼しました」

「ああ、そうでしたか。しかしそうなるど費用が掛かりますが、キリカさんには持たせていらっしやいます？」

キリカは手ぶらだ。

「持たせましたがねえ。持っておりませんか？どこかで落としたのかもしれないなあ」

恥じる様子もなく、のうのと告げる。タヌキが。

「取り合えず、いったん此方へお越しただけませんか？廃棄処分となると費用も掛かりますし、キリカさんが不要なのでしたら、何か良い案がご提示できるかもしれません」

「良い案、ですか。いやあそう言われましてもねえ。費用は振りこませていただきますので、そちらで廃棄処理を願えませんか。そうですね。明日には振り込ませていただきますでしょう」

鈴村の意図が大体理解できた。何の命令もせずキリカを捨てたのは、廃棄処理用の費用を単にケチってのことだ。そのまま上手くどこかへいなくなってくれれば、とも思っただろう。この電話で、費用については諦めたようだが。

「兎に角、わたし忙しいのでコレで。よろしく願いますわ先生」
「ちよつと、鈴村さん」

通信が切れた。寢室の出口に突っ立つオレを、不安そうに見つめるキリカ。非難するように見上げるアリサ。大きくため息を浮かべ、ベッドに腰を落とした。

—Chapter. 1 アリサ [12] (後書き)

次回投稿、11月9日(水) 予定です。

—Chapter. 1 アリサ【13】

「あの子、廃棄処分になるの？」

寝室のベッドの上。寝そべったオレに向かってアリサが話しかけてくる。少女は先刻までキリカが座っていたチェアに腰を下ろし、股付近に手を着いて前かがみになっている。

「それしかないだろう……」

鈴村との電話の後、少し取り乱し始めたキリカを宥め、研究室のベッドに寝かせた。今はスリープモードになっている。アリサも同じようにしようかと思ったが、本人が断固拒否したので諦めた。寝かせるベッドも無い。

「可哀想だよ」

少女は悲痛な声を出す。気持ちは分かるし、鈴村の言うとおりにするのも癪だが、実際他に手も無いのだ。良い案を提示できるかもしれない。電話越しに鈴村に告げた文句は、ただの時間稼ぎに過ぎなかった。

「しかたがないだろう。このまま放り出して、オイル切れで動けなくなるまで町中をうろつかせるか？」

アリサはあくまでも道具。擬似的な人格はあれど、稼動し続ける権利などいかなる法律にも保証されてはいない。オーナーが不要だと言う以上、廃棄されるしか道は無いのだ。

「アンタが引き取ればいいじゃん」

そのうち口にするだろうとは思っていた文言を、少女はいとも簡単に告げた。馬鹿言え、と小さく返し、目を閉じる。

「この工房にはな、固体そのものは変わっても、ほぼ常時アリスがいるんだ。そう何体も面倒見れるか」

告げれば、押し黙ってしまう。アリサとてアリスだ。オーナーに捨てられたアリスがどうなるか等、当然理解している。

「じゃあ、引き取ってくれる人探そうよ」

少しして、少女は提案する。だがそれも却下だ。

「時間が無い」

事実だ。だがアリサは眉を吊り上げる。

「暇じゃんっ」

「今だけだ」

アリサの調律が思いのほか早く終わったせいで、若干の猶予はできた。だがそれも明日まで。明後日の午後には、次のアリスが来る予定になっている。

「もう寝る。キリカの場合は、明日また考えるから」

アリサに背を向け、薄手のタオルケットを肩まで被る。カットソーにデニムと、寝るには落ち着かない格好のままだが、アリサが部屋にいる以上脱ぐわけにもいかない。諦め、睡魔よ早く来いと祈る。羊でも数えようか。

「もう……」

背後でアリサの呟き。数秒の後、タオルケットが背中側からほんの少し、捲られた。もぞもぞと柔らかいものが潜り込んでくる。

「おい」

「何よっ？」

「何してる？」

当然のごとくベッドに入り込んできたアリサに問うた。スリープモードになってしまえば寝心地も何もないのだから、床で寝たって構わないはずだ。

「悪いが、ガキにもアリスにも興味ないぞ？」

「死ねよお前」

冗談めかした断りに過激な台詞を返しながら、オレと背中合わせに、アリサは姿勢を落ち着けた。そうしてすぐに

「ごめん、死ねは言いすぎだった」

等と付け足す。何なんだ一体。

「アンタさ、いくつ？」

少女は唐突に話題を転じる。寝かせる気はないらしい。

「32だ。それがどうかしたか？」

答えれば、別に、と返す。じゃあ訊くな。

「結婚とかしないの？」

「相手がいない」

くだらない雑談だ。別段に目的があるとも思えないし、まだ起きていたいのだろうか。一度目を開け、首を回して時計を見る。24時を回っている。

「じゃあ、彼女もいないんだ？」

アリサの質問は続く。そんなに暇なのか。

「いないよ。欲しくもないし、惚れている女もない。これでいいか？」

話を終わらせようと纏めにかかったが、無駄だった。アリサはけらけらと笑い、何で何で、と話を続ける。

「いたほうがいいじゃん。お昼のさ、美優さんだっけ？ああいう人あんたも見つけてきなよ」

また唐突な名前を出してきた。美優の印象はやはり良かったらしい。設定された印象値は7000前後だろうか。埒もないことを考える。

「一人のほうが楽だから、恋人はいらん。もういいだろう？この話は」

恋愛に興味のある年頃なのだろうか。ふと、アリサがもし人間の少女だったら、確かにこういう話を好むのが普通なのかもしれないと思いついた。アリサは不満そうに、えー、と呟いてから、少し黙った。背後で何かが動く感触。オレと背中合わせに寝ていたアリサが、こちらに向き直ったらしい。

「じゃあねえ、あ、初恋はいつですかー？」

恋愛談義はまだ続く。くだらないと思いつながらも、問われるとつい回答を模索してしまう。初めて心惹かれた女性の顔を思い浮かべようと、はっとする。脳内に火花が散ったかのように思考が明滅し、胸に微かな痛みが走った。

「一つ下の幼馴染だ。ずっと一緒だったから、いつから惚れていた

かなんて、分からない」

気づいた時には、もう一緒にいた。何をするにも、何を選ぶにも、彼女の笑顔を最優先に考えた。恋人ってわけじゃない。身体の関係は勿論なかったし、口付けだって、交わしたことはない。手をつないだことくらいは、もしかしたらあったかもしれない。

急に饒舌になったオレを訝しんでか、アリサの言葉が途絶える。

「その人とは、恋人同士になれたの？」

少し落ち着いた様子で、口調で、アリサが尋ねる。茶化すには不適當な話題だと感じ取ったのだろうか。だとしたらこいつは、大したものだ。

「分からん。でも、世間一般に言うような恋人関係ではなかったかな。オレが18の時に彼女は遠くに引っ越して、それきりだ。今はどこで何をしているのかも知らない」

駄目だ。こういうわけか感傷的になっている。アリサに問われていないことまで、ため息と共に口について出てしまった。アリサはふーんと小さく声に出し、それきり押し黙った。

「アリサ」

会話が途絶えたのを機に、今度こそ本当に寝ることにした。ん？と返事をした少女に告げる。

「Sleep Downだ」

目を閉じる。瞼に浮かんだ彼女は、17の時のまま。今は一体、どうしているのだろう。元気であるといい。素敵な男性に出会って、恋をして、結婚して、今頃子の一人や二人は設けているかもしれない。それはオレにとって、良いことなのか悪いことなのか。分からないまま、オレはゆっくりと意識を手放した。

—Chapter. 1 アリサ【13】（後書き）

次回投稿、11月10日（木）予定です。

Chapter. 1 アリサ 【14】

朝の一服を楽しもうとキッチンへ赴き、焙煎豆のストックが残り少ないことに気がついた。昨日は計三杯。少し飲みすぎだろうか。

コーヒーマーカークからマグを取り出し、湯気と共に立ち上る芳醇な香りを楽しむ。ため息のような、熱を持った吐息が漏れた。やはり朝はこれに限る。寝起き特有の靄に塗れたような脳内に、にわか光が挿すのを感じる。手元の茶褐色の液体に、恐らくそんな効能は無い。毎日の習慣がもたらす、パブロフ的な身体反応だろうと、苦笑する。

「さて……」

小さく声に出し、愛用のマグをサイドテーブルに置いた。ソファに腰掛け、今日なすべきことに考えを巡らせる。はねつかえりはまだ夢の中。ソファが広くていい。

昨夜のアリサとの会話の中、キリカのことはまた明日考えるところ述べた。早く眠りにつくたくて適当に口にした一言ではあったが、言質はきっちり取られている。考えた様子もみせずに廃棄処分だ等とのたまえば、姫君の怒りを買うのは火を見るより明らかだ。頬を膨らませ、細い眉を吊り上げた少女の顔を思い浮かべる。煩そうで適わない。

寝室で鈴村との通話を終えたとき、キリカは取り乱した様子を見せた。宥めるのには苦労したが、錯乱の理由は廃棄処分への恐怖ではないだろう。Physical Illusion社での廃棄処理は、アリスの辿る一つの道。Floatの立場に身を置かれなくても、何かの拍子に修復不能な故障状態に陥れば、やはり辿りつく可能性のある結末なのだ。アリスとして稼動する以上、彼女も当然に覚悟しているべきことだ。実際、十二分に理解してはいただろう。「キリカさんが不要なものでしたら」。オレは鈴村に対しそう口にした。また、話が終わってもいないうちに通話を打ち切られもした。

これらの事実が彼女に改めて突きつけたのだろう。オーナーの自分への愛が、もう完全に失われたという現実を。絶望の刃の、その切っ先を。

暫し沈黙考し、キリカを救うに有用な手立てを模索する。しかし時は流れるばかり。自身の脳をまさぐる思考の指先は、妙案の背は愚か、その影にすら一向に届こうとはしない。しかしそれは、やはり止む無いことではあるのだ。オーナーに捨てられたアリスが廃棄処分にならずに済む方法が短時間の思案で容易に見つかるのであれば、それはとうに確立された手段となっているはずなのだ。やはり今回は、引き取り手を探すのが適当ではあろう。どうにもアナログな手法が気に食わないが、より優れた案が無いのであれば、そうするより他は無い。

一先ずそう結論付け、それから少し、鬱とした心持になる。散々に時間を掛け、出した答えはいかにも稚拙。アリスの思いつきと同案なのだから当然だ。まあ、取り合えずその方針で動いてはみて、上手く転がらなければ諦めればいい。キリカには悪いが、努力する様さえ見せればアリスも納得するだろうし、例えそうでなくとも、明日になれば少女はいなくなる。小太りの王子に手を引かれ、森のお屋敷にご帰宅だ。

コーヒを一気に飲み干し、ソファから立ち上がる。一先ずとはいえ方針が決まってしまうかどうかということはない。少しでも真剣に悩んでいたのが馬鹿馬鹿しくすら感じ、自嘲的な笑みがこぼれた。マグを洗浄機に投入すると、自室を出て浴室に向かった。今アリスは寝室、キリカは研究室でスリープダウンしている。彼女らを起こせばまたうるさくなる。体力も使うだろう。せめてシャワーでも浴びてすっきりし、余裕のある心持でその時を迎えたい。

「あ、おはよ」

浴室につながる脱衣所の戸に手を掛けたところで、背後から声を掛けられた。アリスに良く似た声に聞こえたが、Rebootした覚えはないから、恐らくは幻聴の類だろう。唐突にそんなものが聴こ

えるようになるとは、加齢とは恐ろしい。

脱衣所に入って後ろ手に戸を閉め、昨日から着っぱなしのカッターシャツに手を掛ける。脱ぎようとして思い留まった。丁度全裸になったあたりで、怒声と共に戸が開けられる未来が見えてしまったからだ。舌打ちと共に、閉めたばかりの戸を開く。廊下にアリサ。不安そうな面持ちだ。

「何か、怒ってる？」

オレが口を開くより先に、少女に問われた。憐憫の情に誘われそうなのはねっかえりに有るまじき上目遣い。成る程、挨拶を無視したのをそうとったか。

「いや。お前の発言は無為なものが多いからな。定期的に無視するようにしてるだけだ」

丁寧に答えてやれば、途端に表情が強張った。頬を膨らませ、大きな瞳には力が宿る。らしくなってきた。

「それより、どうして起きてる？ Rebootした覚えはないぞ」

「今日はキリカちゃんのためにいろいろするでしょ？ だったら早く起きないって」

取り戻したらしい元気を声量に変えて答える。小さな胸を思い切り張ってみせ、両手は腰に。何が誇らしいのか妙に偉そうだが、質問に対する答えとしてはややずれている。要は自力で起きたということか。スリープダウンする前に再起動時刻を設定しさえすれば、無論可能な挙動ではある。静かな朝を楽しみたいオレとしては、歓迎できないが。

「まあいい。シャワーを浴びるから、部屋で待ってろ」

言って戸を閉め、今度こそ服を脱ぐ。ドア越しに、キリカは起こすなよ、と付け加えた。

「まったく……」

廊下から聞こえる不満の声を無視し、浴室へ。アリサが廊下から立ち去る足音に安堵しながら、シャワーヘッドのセンサーに触れた。

一 Chapter. 1 アリサ 【14】 (後書き)

投稿予定日を過ぎてしまい申し訳ありません。
次回投稿、11月12(土) 予定です。

Chapter. 1 アリサ 【15】

スリープダウン時、再起動時刻をアリス自身が設定しておけば、同時刻には自動でReboot処理が開始される。この10日間、アリサのRebootは外部からオレが行っていたが、それは自ら再起動する理由がアリサになかっただけのこと。外部からRebootの文言を拝さねば永遠に起き上がれない等ということは全く無い。と言うより、そんな仕様であればアンドロイドとしてはお粗末すぎるだろう。

通常アリスは、オーナーが余程変則的な生活を送っていない限り、24時間稼働しっぱなしという形にはあまりならない。設定にもよるが、概ねオーナーの就寝時刻前後にスリープダウンする。スリープモードに入ること、稼働時に体内で自動生成した動力の消費量を低減し、有事の際の備蓄に回すためだ。しかしだからと言って、オーナーが目覚めた後に自らRebootをかけなければならないようでは、アリスの「最強の家事手伝い」という存在意義、まあオレには建前としか思えないが、それを満たすことすら儘ならない。オーナーより早く目覚め、朝食の準備を始めとした毎日のルーティンワークを進めておく。こんなことは、当然にできなくてはならないわけだ。ついでに言えば、アリスの家事全般に対する技能は基本的に高い。昨日、アリサが乏しい材料で料理の体裁を整えて見せたのも、その証拠と言えるだろう。

浴室から出、脱衣所に用意した真新しいシャツを羽織る。洗面台で簡単に身なりを整え、自室に戻った。部屋で待たせておいたアリサが、オレのために焼きたてのトーストとコーヒーを用意してくれていた。はしないようだ。

「あれ？」

夢想した朝食に加えて、アリサ自身の姿が無い。寝室と、それから研究室も覗くが、そこにもいない。固いベッドでキリカが寝息を立

てるばかりだ。サンダルを突っかけ玄関から外に出た。周囲を睥睨するが、少女の姿は見えない。

「どこ行きやがった……」

玄関ドアを背に体重を預け、工房前の通りを眺めながら勘案する。脱衣所で自室のドアが開くような音を聞いたから、一度部屋には入ったはずだ。部屋の中ですることも無く、窓から何となく外を眺めていて、通りを横切る猫の姿に心奪われ、ふらふらとついて行った。何故だかそんな光景が頭に浮かんだ。昨夜も似たようなことを考えた気がするが、少なくともオレの前で、アリサが猫に興味を示したことは一度も無い。少女の動物好きは、性格から推測される根拠のないイメージだ。一人で外に出ないようアリサに言い含めておかなかったことを少し後悔する。アリサがここへ来てからそんなことは一度も無かったから油断していたが、彼女はあくまでも顧客からの預かり物。一人で外出させた結果何かに巻き込まれ、どこかの機構に損傷でも負われたら大事だ。

「あ……」

ふと思いつき、自室へ戻る。クローゼットを開け、中を検めた。やはりだ。オレの洋服と一緒にハンガーにぶら下っていたアリサのポーチが無くなっている。熊だかパンダだか、得たいの知れない生き物が描かれた幼稚なデザインのポーチ。中には財布しか入っていないかったはずだから、持ち出したということは買い物か。ポーチはアリサが持参した私物の全てでもあるが、さすがに自宅に帰ったということはあるまい。

昨日と同じトラッカージャケットを取り出し、クローゼットの戸を閉める。ジャケットの袖に腕を通して、工房を出た。

昨夜キリカを見つけた裏路地を抜け、少し広い通りに出る。ポケットからタブレットを取り出し時刻を確認すれば、まだ7時40分だ。この付近では比較的交通量の多い通りではあるが、早朝は人もまばらだ。横断歩道を渡り、その先のジャンクショップへ。曇り空に、長方形の建物が纏う煌々としたネオンが目立つ。入り口を潜っ

てすぐ、目的の人物を発見した。レジに出した幾つかの商品の前で、肩から斜めに下げたポーチを漁っている。

「これで」

財布に小銭が多いらしく、まごまごと中々代金を出し切れないアリサの背後から、店員に紙幣を差し出した。アリサの様子を笑顔で見守っていた店員の女性が一瞬目を丸くし、それから少し、戸惑ったような様子を見せる。アリサが振り返った。こいつも店員と似たような表情だ。

「うちのアリスです。そいつで支払いを」

手渡した紙幣を指差して店員に告げ、続いてアリサの頭を軽く小突く。勝手に外に出るなど言い添えると、しゅんと落ち込んだ顔を見せた。

「すみません、先生」

そうだった。こいつは人前ではこうするんだった。店員から商品を受け取りアリサに持たせると、連れ立って外へ出る。工房に向かって歩きながら、アリサを諭す。

「言っておかなかったオレも悪いがな、お前に何かあったら一大事なんだ。絶対に、一人で外に出るようなことはしないでくれ」

袋の中の商品を見るに、アリサが買いに行ったのはオレの朝食だ。であれば余り、強い言い方もできない。とはいえ、表現が良くなかったようだ。

「なになに？そんなにわたしが心配？」

何だか嬉しそうに言う。何かを勘違いしたのか、あるいはわかった上でわざと言っているのか。

「お前のオーナーが絶対に賠償請求はせず、調律料の残金も支払うと約束してくれるのなら、今すぐ壊れてくれてもかまわないぞ」

言って、丁度目の前を通過した大型のトラックを指し示す。

「あれなんかどうだ？粉々に砕いてくれそうだ」

「ムカツクし……」

オレの台詞に表情を一気に曇らせ、ぶつぶつと小さな声で不平を口

にする。勢い込んだ口調での反撃を予想していたのに拍子抜けだ。この態度を鑑みるに、アリサはオレが純粹に自分を心配しているのだと、本当にそう期したのかもしれない。

「まあ、あれだ」

やや気まずい空気を感じ、沈黙を避けるように言葉を繋ぐ。

「オレのために朝飯を買いに行ってくれたんだよな？ それについては、感謝してる」

裏路地に入ったところで足を止め、アリサの前にしゃがみ込んだ。進路を塞がれたアリサも、止む無くといった様子で立ち止まる。覗き込むように幼い顔を見上げれば、いつかのように視線を逸らした。「ありがとな、アリサ」

できるだけ優しく、囁くような口調で、そう礼を述べた。少女は左手に握ったジャンクショップの商品袋をぶらぶらと揺らしながら

「昨日、ご飯はわたしが用意してあげるって言っちゃったから、仕方なくだし……」

と呟いた。視線は合わせず、頬は僅かに桜色。このパターンに陥る度、彼女が見せるお決まりの挙動だ。ちなみに、オレはアリサとそんな約束をした覚えは無い。夕食のときの話をしているのだろうが、だとしたら少女は「ご飯くらいちゃんと用意してあげれば良かった」と、懺悔じみた発言を一つしただけだ。おそらくそれこそが、今後はわたしがと、そのような意味で発せられた言葉だったのだろう。であれば、浴室では口にしなかったが、今日アリサが自分で起きてきたのもオレの食事のためだったのかもしれない。

「ほら、いくぞ」

オレは笑って立ち上がり、アリサの頭を軽く撫でた。

— **C a p t e r . 1 アリサ 【15】 (後書き)**

— C a p t e r . 1 アリサ.. 残り3部。
次回投稿、11月12日(土) 予定です。

Chapter 1 アリサ 【16】

「済まない。ああ、それじゃ宜しく頼む」

タブレットから耳を離し、左手でするすると、引き出していたマイクを格納する。ソファに退屈そうに腰掛けているアリサに向き直った。

「朗報だ。当てが見つかるかもしれん」

伝えれば、ソファから飛び降りて笑顔を見せた。まっすぐな瞳が、期待に満ちて輝いているように見える。

朝食を終え、懸案事項についてアリサと簡単にやり取りをした。キリカの引き取り手を探す旨を伝えると、少女は満足そうな笑みを見せた。それからすぐにタブレットで心当たりに電話を掛け始めることとし、最初に連絡した孝一のところで、いとも簡単に期待の持てる返事を得た。

「よかったあ。でもすぐに見つかったね」

アリサは微笑みながらそう言い、やっぱりみんなアリスが欲しいんだ、等と誇らしげに付け加える。

「まだ見つかったわけじゃない。ま、だとしても運が良かったな」
オレの知り合いに、直接にアリスを欲しがっている人間はいない。少なくとも、オレは把握していなかった。であれば、アリスのことを良く知っており、かつ顔の広そうなアトリエの主人は、最初に当たるにふさわしい有望株だろうと考え連絡を取ったわけだが、返す返すも運に恵まれたとは思えない結果に終わった。

アリスを欲したのは、孝一本人ではない。孝一のアトリエをアルバイトの面接に訪れた若年の男性とのことだった。アリスが欲しいがとても資金が足りない、貯めきる当ても無い。であればせめて、常日頃からアリスに接することのできる環境で働きたい。そのように考えていた時に、孝一のアトリエでアルバイトを募集している旨を知り、応募してきたらしい。青年の面接を行ったのは一昨日。採

否を美優と相談している際にオレから連絡を受け、それは丁度いい、と考えたとのことだった。

「一言でいうならアリスのファン」。孝一の表現だが、稀にそうした人物がいるのはオレも把握している。本人の意思と資金面の都合を孝一から確認した上で、連絡をもらう手筈となった。

「だいじょーぶなのかなあ」

眉をひそめた難しそうな表情で、アリサが言う。

「金の話か？」

「うん。それと、ちゃんとキリカちゃんのことを大事にしてくれるのかなあって」

「ふむ……」

少女の心配は分らないでもない。孝一の見取った印象を信用するならば、後者については大丈夫とのことだ。問題は、孝一からも確認してもらうこととなっている前者、経済面での問題だ。

アリサがただで譲渡可能な商品であるならば、Floatの問題など、潜在化することはまず無いだろう。アリスを譲り受けるためには、一定の資金が必要となるのだ。その額はアリスの本体価格の60%。俗にコモンタイプと呼ばれる通常のアリスであれば、本体価格は1250万円。60%は750万円となる。ちなみにPhysical Illusion社での廃棄に必要な料金は一律250万円。今日鈴村から振り込まれる予定の廃棄料を充当すれば、青年がキリカの譲り受けを望んだ場合、用意しなければならない資金は500万円となる。では、そのような高額な資金が何故必要となるのか。簡単に言えば、Physical Illusion社の利益を確保するためだ。

廃棄時に必要な金額は、単純に処理費用と手数料と言った意味合いが強い。故に、製造元のPhysical Illusion社としてはその額を大きく押し下げるのは難しい。そのような状況で簡単にアリスの譲渡が出来てしまうと、大概のオーナーは、仮にアリスが不要となったとしても、廃棄という選択肢を取らなくなる。

市場には多くの中古アリスが出回り、正規のルートでの販売量に響いてくることだろう。そこでPhysical Illusion社は、アリスのオーナー登録情報に厳重なロックを掛ける。販売時に作成する特殊な電子キーを使用しないと、オーナー情報を変更できない状態をつくるのだ。譲渡時にかかる750万円は、つまりPhysical Illusion社でのオーナー情報変更費用というわけだが、これが中古アリス市場が生成されることに対し、実際に大きな抑制効果を上げている。要はアリスの購入を希望する人間が、1250万円を支払って自分好みの容姿と人格を持ったアリスを購入すると、750万円に中古業者の利益を上乗せした金額を支払って、他人が選んだ容姿と人格を有し、さらに他人に誠心誠意仕えた記憶を持つアリスを購入すると、どちらを選ぶかという話だ。オレがアリスを購入するならば後者を選ぶ気がしないでもないが、アリスは元来的には富裕層をメインターゲットとした商品。オレのように考える人間は多くないらしい。

「まあ、兎に角今は、孝一からの連絡を待とう」

不安がるアリスに経緯を簡単に説明し、そう宥めた。懸念事項はあるが、まずは青年の決断を待たねばならない。

座って寛ぎたくなってソファに向かい、アリスが邪魔なので退かそうとし、退かないので諦め、寝室に向かおうとする。

「どこいくのー？」

部屋を出ようとしたオレの背に向かい、アリスがソファから立ち上がってそう問うた。目的の場所が空いたので、足早に少女の元に向かう。少女が反応するより早く、小さな尻を押しつけてソファに腰掛けた。

「ああっ、あたしのソファ」

悲痛な声を上げるが、当然無視する。第一お前のソファじゃない。アリスは目を細め、何か白けたような顔を見ると、そのまま迷わずオレの膝の上に乗ってきた。小さな体からは想像しがたい重量が下半身を襲う。

「お前、ちょっと待てっ」

無視される。復讐のつもりなのだろうか。尻は小さく太股は細い。そのせいで加重面積が狭いのだが、とはいえ段々慣れてきた。

「キリカちゃんのこと、ちゃんともらってくれるといいね」

オレの胸に背を預け、アリサが言う。鼻先に少女の後頭部。これが人間の少女であれば、シャンプーの良い香りでも漂ってきそうだが、残念なことにアリスは無臭だ。

「どうだかな。500万って言えばそれなりの額だ。そのへんの兄ちゃんに用意できるかというのと、難しそうだけだな」

孝一の手腕にも期待しよう。

「あー明日でこのソファともお別れだあ」

寂しそうにも、清々としているようにも聞こえる妙な声色で、アリサが言った。別れを惜しむ台詞だが、どうも対象はオレではないらしい。

「お前が座っているのは、ソファじゃないけどな」

一応注釈を入れておく。嬉しいくせにーと嘯き、アリサは少し押し黙った。そして唐突に

「時々、遊びに来てもいい？」

等と尋ねてくる。僅かほどの疑いの余地も無く迷惑だが、そう口にするれば流石に傷つきそうだ。承諾はしないように、間違っても言質を取られないように、適当にごまかすことにする。

「何だ。帰りたくないのか？お前」

「え、それは帰りたい。旦那様に会いたいし」

「そうか……」

返答に鼻白む。アリスに何がしかの好意を寄せられたい等という想いは毛ほどもないが、アリサの返答をどこか腹立たしくも感じてしまふ。それが妙に情けない。会話が途切れたまま、沈黙が続いた。先ほどの質問にオレが答えていないことに触れないあたり、アリサも本気で言っていたわけではないのかもしれない。まあ考えてみれば当然だ。オーナーの元で、オーナーのために尽くす以上の幸せな

ど、アリスにはないはずなのだから。

—Chapter. 1 アリサ【16】（後書き）

次回投稿、11月13日（日）予定です。

Chapter. 1 アリサ 【17】

孝一から連絡があったのは、夕刻に差し掛かった頃だった。聞けば、青年はキリカに大いに興味を示し、全財産をはたいてもいいと、狂喜乱舞の体だったらしい。金は足りないが何とかするとの主張で、兎角一度オレの工房を訪ねてもらう手筈となった。鼻歌を歌いながら夕食の準備をしていたアリサにその旨を伝え、研究室でキリカを起した。

「新しいオーナー、ですか？」

不安げな面持ちで、ベッドに腰掛けたキリカは言う。

「ああ、オレより少し若いくらいの兄ちゃんらしい。お前を是非譲り受けたいとのことだ。二三日中にここへ来てもらうことになっているから、会ってみてほしい」

言えば、おずおずといったように頷く。

「本来は廃棄処分になる身ですから。有難いお話だと、思います」キリカの心情を慮れば、オレは勝手なことをしたということになる。今のキリカにとって最も夢のある選択は、現オーナーとして登録されている鈴村の元へ戻ること。印象値を、オーナーに対するものとしては通常あり得ない値まで下げられたとはいえ、それでもオーナーに尽くしたいと考えるのがアリサ。だがキリカとて分かっているのだ。オーナー登録情報を変更されてしまえば、自分の気持ち等がらりと変わってしまうということを。

「先生、何から何まで、本当にありがとうございます」

キリカは丁寧な頭を下げた。それから少し笑って、先生がオーナーだったら良かったなど、本気とも世辞ともつかぬことを口にする。

「もう少ししたら晩飯だ。お前も居間に来るか？」

自室のことだ。アリスは食事とはいいえ、ずっとここに寝かせっぱなしにしておくのも、除け者になっているようで落ち着かない。

「よし。じゃあ行こう」

キリカが頷くのを確認して、サイドチェアの上からオイルの入ったボトルを取り上げた。少女の手を引きながら、簡単なメンテナンスはしてやらないと、そう考える。

自室のテーブルの上には、既に食事が用意されていた。今日はハンバーグか。デミグラスソースの濃厚な香りが、食欲をそそる。

「あ、キリカちゃんだ」

ソファでオイルを飲んでいたアリサが歓声をあげる。すっかりその場所が気に入ったようだ。

「おいでー」

自分の身体をずらしてソファにスペースを空け、そこに座れと促す。戸惑うキリカにオイルを手渡し、優しく背を押してアリサの元へ行くように促した。自分はテーブルにつく。

「今日も旨そうだ。ありがとうアリサ」

箸をとって礼を述べる。少女は誇らしげに何度も頷いてみせた。

「アリスが欲しくなっちゃう？」

キリカと並んでソファに腰掛け、オイルを飲みながら言う。

「いや、別に」

「素直じゃないなあ」

アリサはけらけらと笑い、本当は欲しくてしょうがないんだよと、隣のキリカにふざけたことを囁いた。相変わらず馬鹿を言う。

「アリサちゃんは、いつまでここに？」

キリカが尋ねる。アリサは残念そうに眉をよせ、答えた。

「わたしは明日までなんだ。明日の午前中に、旦那様が迎えにくてくれることに……」

そこまで言って、言葉を止める。小さな声で、ごめん、と呟いた。キリカは笑い、気にしないでと眼前でゆるく手を振ってみせる。

「キリカの、新しいオーナーになる予定の彼だが」

妙な雰囲気になりかけたので、オレはハンバーグを咀嚼しながら、ソファの二人を見て言った。

「いい男らしいぞ」

美優曰く、だ。ちなみに何の嫉妬か孝一は否定していた。あくまで商品であるアリスにとって、オーナーの容姿等瑣末なことだ。アリスもキリカもそんなものはどうだっていいと思っているだろう。だが、雰囲気を変えるきっかけにはなったようだ。アリスが前かがみになって抗議する。

「何かうちの旦那様が不細工って言われてるみたいに感じるんだけど」

事実ではあると思うが、オレは手を振り

「そんなことはないさ。元村さんだって、魅力的な男だぞ」
そう言った。

「耳たぶとか、睫とか足の裏とか、すごく整ってるじゃないか」

「どーでもいいとこばっかじゃんっ」

埒もないやりとりだが、キリカは笑ってくれた。アリスもちゃんと分かっているようだ。

「あ、でもさ」

これはアリス。

「明日の午後からキリカちゃん、コイツと二人きりでしょ。気をつけないと。襲われちゃうかも」

襲うわけがない。キリカは少し困ったような表情を見せる。

「お世話になってるし、それくらいは別に」

曖昧な笑顔で、右の指先で頬を搔くようにしながら、少女は答えた。

「あ、そう……」

回答に面食らったアリスが言葉を失する。馬鹿か。オーナーにそう舐けられてきたキリカにとって、人間との性交渉はその程度のものなのだ。ふと、新しくキリカのオーナーとなるかもしれない例の青年にも、このことは伝えておかねばならないと気づいた。

「襲ったりはしないけどな、それ以前に、オレとキリカは二人きりにはならないぞ。明日の午後、お前と入れ違いで新しいアリスが来る」

アリサに向かって告げた。少女は感心したように、へえ、と言

「繁盛してるんだねえ」

しみじみといった感で、深く頷いてみせた。

「まあな。さて……」

食事もあらかた終えたので、食器類の片づけを二人にまかせ、オレは自室を出る。明日来る予定のアリサの資料に、もう一度目を通しておかねばならない。研究室に向かった。

一Chapter. 1 アリサ 【17】（後書き）

一Chapter. 1 アリサ.. 予定通り次でラストです。
その後、一Chapter. 2 邂逅 に入ります。
次回投稿、11月13日（日） 予定です。

Chapter. 1 アリサ 【18】

プレジデントチェアに腰掛け、デスク備え付けの液晶に調律依頼書と要件書を表示させる。アリサが来る前日にも同じ作業をした。その時の様子を思い出し、何だか随分と忙しい10日間だったと、改めて脱力感に襲われる。

「どうしたものかな……」

表示を要件書の上に切り替え、依頼内容を読み進めていく。調律に掛けられる期間は明日を含め14日間。過去の例に比しても長い方だ。

アリスの調律料金に、明確な基準は無い。調律師次第、工房次第だ。オレの場合は調律の内容から作業に要する期間を算出し、日数に5万5千円を乗算した額を調律料金として請求している。アリサの場合は10日間だから55万円。諸費用を差引くと、40万円弱がオレにとっての利益となる。調律料金は契約時に算出した料金で完全固定としており、今回のように調律が早く終わっても一部返金したりはしないし、逆に長引いても追加料金を請求することは無い。

液晶に表示されている要件書の調律依頼の場合、総額は77万円。前金で4割以上を貰えば、調律完了後に残金を支払うことも許可しているが、今回は既に全額が振り込まれている。結構なことだ。

指先で液晶をスクロールさせ、具体的な調律内容を記した項目に移行する。通常はそれなりに項目数があるわけだが、今回は極めて特異。要件書のその箇所には、ただこの一文のみが記されている。

「先生のお好きなように」

背後で物音がし、思わず身体を震わせてしまった。振り返れば、研究室の入り口から中を覗き込んだアリサがからからと笑っている。

「どうした？」

「んー、何してるのになって」

ベッドに腰掛け、片付け終わったよと言い添える。大きな瞳が、デスクの液晶画面を捉えた。慌ててスクロールさせ、表示を別画面に切り替える。個人情報と言うほどのものでもないの、見られたところどうということもないのだが、まあ一応だ。

「明日から来る子の要件書？」

「ああ、そうだ」

「ふーん」

デスクに寄ってきたアリサの小さな手が、液晶画面に伸びる。その手首をそつと掴み、押しとどめた。

「勝手に見るな」

言えば、えー、と不満の声を漏らす。

「調律、難しそうなの？」

ベッドへ戻ったアリサが問う。

「まあ、そうだな」

難しそうと言えば難しそうだ。要件書の一文が思い出される。依頼内容が、幾らなんでも奇態に過ぎる。依頼主であるオーナーが何を考えているのか、いまいち読めない。まあそれは、アリサのオーナー、元村も同様と言えるが。

当該の調律依頼は、タブレットによる通話で受けた。「田宮晴彦」と名乗る若年の男性で、直接顔を合わせてはいないため、どのような人物であるのかはよく知らない。声の調子からオレよりも年若いのではないかと思うが、であれば、いわゆる青年実業家の類だろうと思う。アリスは高額商品。普通の企業勤めの人間が、若くして購入するのは難しい。

「気分を変えたいだけなんです。ほらいつも一緒にいるでしょ？だから、彼女が今までとは少し違う雰囲気になってくれさえすれば、それでいいんです。どう変わるかではなく、変わるこそそのものが大事。どう変えるかは、先生におまかせします」

電話越しに、田宮青年はそうように言った。人と話すことがあまり得意でないのか、たどたどしい口調で。主張は分からないでもない

が、珍妙な依頼であることに変わりはない。

液晶に調律依頼書を表示する。契約書も兼ねるそれには、調律対象となるアリスの型番と名、加えて田宮晴彦の名も記されている。

「あっ、Xタイプだ」

考えに耽っていたせいで忘れていた。アリスが見ていたのだった。記された型番の特徴を目ざとく見つけた少女が、再びデスクに擦り寄ってくる。その通り。Xの型番には特別な意味がある。

「そのアリスってさ、もしかして……」

興味深そうにデスクを覗き込むアリスを見やる。一つため息。会うこともないだろうアリスに、どうにも興味が尽きないようだ。個人情報だから他言無用だぞ、と言い添えてから、告げた。

「名前はロザ。型番はXの7055。オレも初めて扱う、カスタムアリスだ」

一 Chapter. 1 アリサ 【18】 (後書き)

一 Chapter. 1 アリサ..ここまでです。

次回投稿、11月14日(月) 予定。一 Chapter. 2 邂逅に入ります。

Chapter. 2 邂逅 [1]

Chapter. 2 邂逅

「ちよつとっ。触らないでよっ」

アリサを抱きしめようと伸ばした元村の腕を、小さな掌がしたたかに打ち付ける。既視感のあるやり取りが再現されている自室の隅で、オレは小さくため息を浮かべた。

「いかがです？元村さん」

暴れるアリサを強引に抱きしめ満面の笑みを浮かべる中年男にやや閉口しながらも、オレはそう問いかけた。相好を崩す元村は今にもアリサに口付けでもしようかという雰囲気であったが、オレの言葉にその存在を思い出したか、アリサをゆっくりと解放した。此方に向き直り、やや表情を引き締める。初めて会った時同様、趣味の悪いスーツに身を包んでいる。

「素晴らしいですよ朝倉先生。いや、やはり先生にお願いして良かった」

元村は何かしら調律結果にケチをつけてくるのではないか。そう懸念し、孝一のアトリエで外面改修のサンプルを採るまでした。だが元村は工房へ訪ねてきてから、心底喜ばしいといった態度でアリサに接している。オレの心配は、つまるところ杞憂に終わったらしかった。

「問題がなければ、こちらにサインを。後でコピーを送らせていただきます」

研究室から持ってきた小型端末に調律依頼書を表示し、電子ペンと共に差し出す。元村は笑顔でそれを受け取った。

「いやね、実は迷ったんですよ。大事なこの子の調律を、どこの工房にお任せするか。Physical Illusion社に問い合わせまでしてしまいましたよ。いやでもしかし、返す返すもここ

にお願いしてよかった」

ペンを液晶に走らせながら、元村は言う。調律師として独立してから100体近いアリスを扱ったが、ここまで絶賛されるのは初めてかもしれない。

「Physical Illusion社と我々調律師は、業務的に提携関係にはありません。問い合わせはカスタマーセンターに？」

「ええ。腕のいい調律師のいる工房を教えてくださいたら、同じ説明をされてしまいました」

元村は気さくに笑う。オレはもしかしたらこの男を誤解していたのかもしれない。調律師の説明を聞きに工房へ来た時は終始眉間にしわをつくっていたが、単にそれだけ真剣だったと言うことなのだろう。

「でもね、教えてくれましたよ。それでここへ」

「教えてくれた？ Physical Illusion社のオペレーターが、私の工房を、ですか？」

元村は頷くが、通常はあり得ないことのように思う。とはいえオレは元々Physical Illusion社の人間だ。当時の同僚の中には、オレが今ここで調律師をやっていることを知っている者もいくらかいる。そのうちの誰かだろうか。

「はい先生、どうもお世話になりました」

サインの終わった端末をオレに返し、元村は軽く頭を下げる。同じように礼を返した後、そろそろ工房を辞そうかという元村に待ったをかけた。

「キリカ、メモリを」

オレの背後で黙って待機していたキリカにメモリカードを持ってこさせ、元村に手渡す。孝一の工房で作成してもらった外面改修のサンプルデータが格納されたものだ。本来の意図では不要になったが、とはいえ渡さなければ無駄になる。

「アトリエを利用されるとおっしゃっていたでしょう？この近くにあるHIBINOというアトリエで作成したサンプルデータです。参考にお持ちください」

「サンプルですか。いや、何から何まで、ありがとうございます」再度頭を下げ、元村はアリサの手を引く。キリカと共に二人を玄関まで案内した。

「それじゃ元村さん、また何かありましたら、ご連絡下さい。アリサも元気でな」

玄関ドアを背に並んで立つ二人を、廊下から見送る。

「アリサちゃん、またね」

これはキリカ。アリサにむかって手を振ってみせる。

「では、我々はこれで」

ドアが開かれる。元村の言葉を最後に、二人は鉄扉の向こうへ消えた。全身を襲う脱力感。午後に新しいアリスが来るまでの短い時間だが、取り合えず一息つけそうだ。

「アリサちゃん、一言も喋りませんでしたね」

並んで立つキリカが此方を見上げ、そう言った。

「オーナーの前だからな、あいつもいろいろあるんだろう」

「本気で言ってます？」

オレの言葉に少女は微笑む。

「寂しいんですよ。先生と離れるのが」

「馬鹿言え。とっとと帰りたいって言ってたぜ」

自室に向かって歩き始めながら、そう返す。だが恐らくはキリカの言うとおりのだろう。アリサの顔は、寂寥感に満ちているように見えた、ような気がする。心の何処かで、そうであってほしいと願う自分に気付き、苦笑する。

「キリカ。昼飯、頼んでいいか？」

まずは昼食。腹ごしらえを済ませたら、訪問者の登場まで、ゆつくり読書でもしよう。アリサはもういない。きっと静かに寛げるはずだ。キッチンへ向かったキリカの小さな背を見つめながら、オレはソファにゆっくりと腰を下ろした。

Chapter. 2 邂逅 【1】（後書き）

次回投稿、11月15日（火）予定です。

—Chapter. 2 邂逅【2】

自室のソファに腰掛け、タブレットの液晶画面に指先で触れる。ホログラフィーで中空に投影された最新のニュース情報を眺め見ながら、訥々と時を過ごす。キリカは研究室でスリープダウン中。工房は静まり返っている。

どこぞの金持ちが、過去最高額となるアリスを購入したらしい。コモンタイプのアリスは販売価格が固定されているので、当然カスタムタイプのアリスということになる。体毛の全てを金糸で作成し、大量のダイヤモンドをすり潰して鑄造した特殊なペーストで、肩口にオーナーの名を刻印したらしい。しめて7200万円だそうだ。まあ、趣味は自由だと思う。

カスタムタイプのアリスは、通常のアリスとどう異なるのか。基本的に、大きくは変わらない。ただ、外貌や人格といった顧客が購入時に選択可能な項目に関して、ゼロからの生成が依頼可能となっている。数万に及ぶ選択肢の中から選ぶのではなく、購入者が望むものを、望むとおりに作成できるわけだ。購入時の一度のみに限り、Physical Illusion社が工房とアトリエの作業を代行すると言えば、分かり易いかもしれない。価格は1450万円からで、上限は無し。盛り込むオリジナルの要素が些細なものであるならば、コモンタイプのアリスを購入してから、アトリエと工房を個別に利用したほうが安上がりな場合もある。

「ん……？」

玄関方向に、気配を感じた。僅かな物音。新しい姫君のご到着らしい。ホログラムを消去し、タブレットをサイドテーブルに置く。玄関に向かう途中で、訪問者が鳴らしたらしい呼び出し音が響いた。玄関ドアの外に設置された小型カメラは、今頃タブレットに訪問者の映像を送信しているはずだ。

「今開ける」

ドア越しにそう告げ、ロックを解除する。内側から鉄扉を押し開いた。開いたドアの隙間から、レトロなデザインのキュロットと、細く白い太股が視界に入る。

「ようこそ改造基地へ」

埒もない冗談を口にしながら、ドアを開けきり、そのまま言葉を失った。

「どうして……」

自分の瞳が、異常なほどに見開かれているであろうこの双眸が映し出す光景が、まるで理解できない。動悸が異常に早くなるのを感じる。鉄扉の表面に触れた指先が、がくがくと震えだすのが分かる。

雪のように白い肌。高く通った鼻筋。大きく、どこか憂いを秘めたような瞳。毛先を内に向かせたセミロングの頭髮は艶やかに輝き、微風を受けて揺れている。

「どうして、突然……」

声が掠れる。膝が笑い、力が入らない。オレはこの子を、良く知っている。誰よりも、誰よりも良く知っている。

「先生？」

小首を傾げた少女が、不思議そうにオレを見る。そうだ。その声。記憶の奥底にしまわれていた、懐かしいその声。

「あきらっ」

勢い込んで叫ぶように名を呼び、少女の手を取る。強く引き寄せ、バランスを崩した小さな身体を抱きとめる。両腕を背と肩口に回し、思い切り抱きしめた。

「ちよっとっ。朝倉先生っ」

腕の中で戸惑ったような声をあげる少女を無視し、柔らかな髪に自身の顔をうずめる。美しく輝くライトブラウンの髪からは、きつと懐かしいシャンプーの香りが、オレの好きだった彼女の香りが、控えめにたゆたうに違いない。

「あの……」

少女は抵抗はせず、しかし恐々といった様子は漂わせながら、言葉

を紡ぐ。

「今日からお世話になります、ロザと、申します」

「えっ？」

少女の言葉。腕の中でオレに見せる困惑の表情。一向に運ばれてこない懐かしい香り。ようやくと、自分がとんでもないことをしているのではないかという疑念に駆られる。

「型番は、Xタイプの、7055です。先生」

「えっと……」

ゆっくりと手を離し、ロザと名乗った少女を解放する。濃霧に包まれた思考を叱咤激励し、気を落ち着けようと必死に努める。そうだ。良く考えろ。この子が彼女であるはずがない。永峰あきらであるはずがない。目の前の少女は、記憶の中にある17歳の彼女と瓜二つ。彼女本人はとうに、30を超えているはずなのだ。

「舌の裏を」

頭では理解した。だがまだ感情が、思考についてこようとしない。少女は小さな口を目いっぱいに開き、指先で自身の舌を捲りあげて見せた。恥ずかしそうな表情がひどく胸を突く。だがそこには確かに、例の数字が刻まれていた。

「その、済まない」

遅ればせながら現実を悟り、少女に告げる。こりゃクレームになるかもなど、妙に冷めたことを考えた。

「わたしは先生のお知り合いに、とても良く似ているようですね」
慈しむような笑みを見せ、ロザは言う。その言葉に、耳を撫でるような済んだソプラノに、何故だか涙が出そうになる。オレは何をやっているのだろう。鼻を押さえ上を向き、熱くなった目頭をごまかそうと奮闘する。

「先生、泣かないで」

少女は優しく言い、ほっそりとした指先でオレの頬に触れた。白い指を濡らす小さなしずく。努力の甲斐もなく、オレの涙腺はとっくに決壊していたらしい。自然と笑いがこぼれる。恥かしさをごまか

すためなのだろう。いい大人が情けないったらない。

「じゃあ改めて」

優しさを感じさせるとびきりの笑顔で、ロザは言う。

「本日よりお世話になります、アリスXタイプ7055、ロザと申します。宜しくお願いしますね。朝倉先生」

「ああ、調律師の朝倉冬治だ。よろしくな。ロザ」

ロザは笑うと、両の頬にえくぼができるようだ。どうして、そんなところまでが彼女と同じなのか。目の前の笑顔に15年前の記憶を重ね、オレは再び、目頭が熱を持つのを感じていた。

—Chapter. 2 邂逅【2】（後書き）

次回投稿、11月15日（火）予定です。

—Chapter. 2 邂逅【3】

永峰あきら。

物心もつかぬ頃、恋という言葉も知らぬ頃より、多くの時間を共に過ごした美しい人。オレが守らなければならなかった、大切な家族。小舎制のこじんまりとした児童養護施設で幼少期を共に過ごし、彼女が里子に出されてからも、互いに暇を見つけては、笑いあい、回顧に興ずる時間を作った。彼女が特有の儂げな笑顔で小さな提案を零したのは、オレが高校3年生の時、確か夏季休暇が明け、幾日も経たぬ頃だったと思う。

「お祭りがあるの。再来月のね、5日と6日。土日だよっ」
オレが通う高校から程近いカフェのテラス席。向かい合って座った彼女はオレの目をまっすぐに見つめながら、楽しそうにそう口にした。

「行きたいな。出られるの？」

彼女からこの手の誘いを受けるのは久しぶりのことだったと思う。里親が厳しい人だったようで、彼女に夜の外出の許可が出るのは極めて稀なことだった。

「5日の夜ね、お父さんもお母さんも、仕事でいないの。だからこっそり出ちゃおうと思って」

6日なら、お昼になるけど。弾んだ声をそのままに、彼女はそう付け加えた。

「祭りっていったら夜だろ、やっぱり。5日に行こう」

そう答え、妙に嬉しげな声を出した自分を恥じたのを覚えている。頷いた彼女の満面の笑みを脳裏に刻み、カフェを出た。並んで歩きながらぽつぽつと話す。その話題を出したのは、確かオレからだっ

た。
「学校はどう？楽しくやれてる？」

通う高校は別だった。オレはそれなりに友人もでき楽しく過ごせて

いたが、彼女はとうだったろう。友人の話をまるで聞かないのが、少し気になっていたように思う。

「まあまあだよ。うん、まあまあ」

オレと視線を合わせずに彼女は答え、そういえば、と話題を転じた。その話題に興味を引かれたからなのか、あるいは共に過ごせる貴重な時間を、楽しいままに終わらせたいと願ったからなのか。彼女の雰囲気を読みながらも、それ以上の追求をオレは控えた。彼女は笑い、驚き、はにかみ、ころころと表情を変えながら、オレに楽しくも心やすらぐ時間を呈じてくれた。

「お祭り、約束だよ。絶対だよ」

そう念を押し、彼女は改札口の向こうに消えたはずだ。そんなものは持っていないだろうと思いつながらも、彼女の浴衣姿を拝める二ヶ月後を想じ、オレも帰路についたのではなかったか。通行人の視線から、にやけそうになる口元を隠すのに必死だったように思う。

「あきら、大丈夫かな……」

思い返せばオレ達の幸せは、その日を最後に途切れたのだ。約束は果たされず、彼女は里親の仕事の都合で、容易には逢えぬ土地への転居を余儀なくされた。経済的な問題でタブレットを始めとする通信機器の所持が許されなかった彼女への連絡は難しく、当時既に旧世代の遺物と化していた有線電話での数回の通話を最後に、一切の連絡が途絶えた。

暫くして高校を卒業したオレは知り合いのツテで何とかPhysical Illusion社の高卒採用枠に潜り込み、それから先は忙しさに感け、ただ目の前の日々のみを思う生活に没れていた。彼女を思う機会は少しずつ少しずつ減っていき、いつの日かその行為は他の想い出が頭を過ぎるのと何ら変わらぬ、ただの回顧となった。

アリスが発売されたのは、オレが最後に彼女と連絡をとってから5年後のことだった。

—Chapter. 2 邂逅【3】（後書き）

次回投稿、11月16日（水）予定です。

—Chapter. 2 邂逅 [4]

ロザの荷物は多かった。少女は自室の隅で自身の身体ほどもある旅行用トランクの前に膝を突き、笑顔で整理作業に勤しんでいる。何が楽しいのか、今にも鼻歌でも歌いだしそうな雰囲気だ。

「随分と多いな」

近づいて声を掛けると、見知った笑顔を向ける。

「長期滞在ですから。このくらいはないと困っちゃいます」

小さな唇から発せられる、一切の不純物を含まない澄み切った音色。一音一音が記憶に相似し、どうにも感傷を誘う。埒もない回顧に寄る意識を首を振って排除し、大きく口を開けたトランクの中を覗き見る。

「快適に過そうと思えばそうかもしれないが、珍しくてな。今朝までここにいたアリスは、財布しか持ってこなかった」

トランクの中には、多種多様な物品が効率良く格納されている。何着もの衣服。下着の類が入れてあると思われるポーチに、近年余り見られなくなった紙製の書籍。タブレットやぬいぐるみまである。どうやら全てが必要なものというわけでもないようだ。

「先生は……」

トランクの蓋を閉め、取り出した幾つかの持参品をその上に載せながら、少女は言う。

「アリスがお好きなんですか？」

視線はトランクに向けたまま。端正な横顔は、どこか物憂げに見える。

「何故？」

何かを意図して問うたわけでもないだろうとは思いつながら、しかし何故そう思うに至ったかを図りかね、尋ねた。ロザはオレに視線を戻し、少し笑って言う。憂い顔は気のせいかな。表情は晴れ渡っている。

「調律師をやっておられるのは、アリスが好きだからなのかなって」

深い意味はないですよ、と付け足した。

「人に使われるのが苦手だな。独立しようと考えたときに、アリス絡み以外の選択肢がなかったただけだ。スキルや知識の問題だな」

「なるほど」

少女は小さく頷き、立ち上がる。閉じられたトランクの上には、タレットとオイル入りのプラスチックボトル、財布とぬいぐるみが乗っている。当面頻繁に使いそうなもの、というわけか。一つを除けば理解できる。

「それは？」

ぬいぐるみを指差し、尋ねる。灰色で、妙に平べったい。なんの動物を模したものなのかまるで分からないが、どこかで見たような形状をしている。

「ぺちゃんこあらです」

ロザは答え、ご存じないですか、と首を傾げる。少女の話によると、ぺちゃんこのコアアでぺちゃんこあら。数年前から女子供を中心に流行しているキャラクターらしい。眺めていて、既視感の理由に思い至った。アリスのポーチに描かれていたのが、確かこのキャラクターではなかったか。得心はいった。しかし何とも馬鹿馬鹿しいキヤラクターだ。

「とりあえず、だ」

ロザも人心地ついたようなので、作業に入ることしよう。

「簡単な動作チェックを行いたい。研究室に案内するから、ついてきてくれ」

壁のハンガーから白衣を取り、袖を通しながら自室を出た。研究室のベッドに案内しようとし、思い出す。そういえばキリカが寝ていたのだった。

「キリカ、Rebootだ」

キリカを目覚めさせ、相互に紹介を済ませると、空いたベッドに口

ザを腰掛けさせた。続いて下着を除いて服を脱ぐように告げる。キリカは少し離れた場所で、退屈そうにオレ達を眺めている。

「脱がないと、駄目でしょうか？」

素直に指示に従うと思いきや、ロザは不安げな眼差しでオレを見つめ、そう問うた。少々意外な反応だ。

「無理にとは言わないが、脱いでくれたほうがチェックはし易い。何か脱げない事情でも？」

人格プログラム次第とはいえ、アリスにも羞恥心はある。とはいえオレは調律師。恥かしいから、等といった戯言を聞き分けるつもりはない。幼馴染に良く似た彼女の柔肌を眺め見るに抵抗はあれど、相応の報酬を受け取っての仕事に手を抜くわけにもいかないのだ。ロザはオレの問いには答えず、しぶしぶといった様子で身にまとっていたキャミソールに手を掛けた。抜けるような白い肌と、同色のシンプルな下着が露になる。

「少し動かずにいてくれ」

首から提げた聴診器を手に取り、イヤーピースを装着する。ベルと呼ばれる集音部を右手で掴み、白肌に滑らせた。

耳管を通して、微かな駆動音が聞こえてくる。オイルの流れも正常なようだ。

「右手を上げてくれ」

身体の各部を順に動かさせ、駆動音にノイズが混じっていないかを綿密にチェックする。どうやら何も問題はないようだった。

指示を受け再び着衣をまとったロザが小さく息をつく。緊張したのだろうか。だとすれば随分と小心なアリスだと思う。オレはデスク前のプレジデントチェアに腰掛け、少し距離を空けて少女と向かい合った。

「忙しくて悪いがな、調律方針についてお前の意見を聞きたい」
宣言すれば、少女ははいと頷いて背筋を伸ばす。通常は発生しえない作業だが、今回ばかりは勝手が違う。「先生のお好きなように」。
要件書のふざけた一文が思い起こされる。続けて口を開こうとして、

思い至った。

「キリカ、悪いが外へ出ていてくれ。ああ、そうだな、夕食の準備を頼む」

どう指示すべきか迷い、思いつきでそう告げる。要は部屋から出てくれさえすればそれでよかったのだが、キリカは困惑の表情を浮かべた。聞けばもう食材のストックがないらしい。アリサがジャンクショップに勝手に買い物に出たのを最後に何も補充していないのだから、当然と言えば当然か。

「じゃあ準備はいいから、とりあえず……」

自室に行っている。出しなおそうとした指示はベッド上の少女に遮られる。ロザは胸の前で小さな掌を合わせるようし、微笑んで言う。「でしたら先生、お買い物にいきませんか。わたしと、キリカちゃんと、先生と三人で」

「食材を買いにつてことか？」

「ええ。先生さえよろしければ」
提案に少し逡巡する。オレとしては作業を優先したい。しかし食べるものもないのであれば買い物にはいずれ出ねばならないし、運動性能の低いキリカを一人で外出させるのも憚られる。暫く沈思黙考し、結論を出した。

「仕方が無いな。二人とも準備しろ」
立ち上がり、白衣を脱いだ。

—Chapter. 2 邂逅【4】（後書き）

次回投稿、11月17日（木）予定です。

—Chapter. 2 邂逅 [5]

アクセルペダルを踏み込み、スピードを上げる。愛用のミニバンの中。アリス二体は並んで後部座席に座っている。工房から車で30分程度のショッピングモールに向かいながら、乗車前のやり取りに想いを馳せた。

「157センチです。先生」

お決まりの質問に、ロザはそう答えた。アリスと違って不要な小数点以下を口にしなかったのは褒めてやりたいところだが、問題もある。彼女が口にした、まさにその数値に関してだ。

いくらなんでも妙だ。繰り返し繰り返し、その言葉が脳裏を過ぎる。少女が口にしたその数値は、あきらのそれと全く同一ではなかったか。無論オレの記憶に錯誤がある可能性も否定はできない。だが考えれば考えるほど、そうとしか思えなくなってくる。

「素敵な人だといいね」

背後ではロザが、2〜3日中にやってくるらしいキリカの引き取り手についてそう言葉をかけている。頭の中に疑念は渦巻けど、二人が打ち解けたらしいのは良いことだ。

「お前ら、音楽は好きか？」

前を見つめたまま、オレは二人に問うた。小さな唇から、それぞれに肯定の言葉が返る。左手でナビに触れながら、片方の少女に問うた。

「キリカは、どんなのを聞くんだった？」

演歌とアイドルソング以外の回答があれば、それを流そうと考える。ロザに尋ねるのは憚られる。もしそんなものまで彼女と同一であったならば、どうしてもそう考えてしまうからだ。

「主には、クラシックを」

キリカは答え、少し俯く。バックミラーでその様子を観察し、失敗に気がつく。オーナーの好みはアリスの好み。このベクトルを鑑み

れば、クラシックはキリカのオーナー、鈴木千早の好みに違いない。オレが押し黙ったせいで、車内を沈黙が支配した。

「先生、ここは思い切ってアニメソングなどっ」

人差し指を立て、ロザが元気にそう口にする。ナイスフォローだ。キリカが少し笑うのが見えた。

「ぺちゃんこあらのテーマはありますか？先生」

「無い」

あるわけがない。アニメ化されていることも今知った。キリカが問う。

「ロザちゃんは、アニメが好きなの？」

「あ、いや、全然……」

「何それ」

くすくすと笑うキリカの表情は晴れている。ロザの間抜けな発言が自分を思っているものだということには、当然気がついていいるのだろう。車内の空気が再び濡れることを懸念し、会話に入る。

「流行っているらしいぞ。ぺちゃんこあら。キリカ知ってるか？」

問えば、少女は頷いてみせる。

「そういうキャラクターがあることは知っています。見たことはないですが」

どうやら流行っているというのは本当らしい。ロザがその珍妙なキャラクターについての解説を始めたので、キリカは彼女に任せ、オレは運転に集中することにする。程なくして、目的地に到着した。

「着いたぞ。二人とも降りろ」

ドアをロックし、連れ立って駐車場を出る。前方には、白い外壁で統一された巨大な建造物が大量に並んでいる。

「すごい。大きいですね」

隣でキリカが感嘆の声を漏らす。彼女は殆どオーナーの家から出なかったと言っていた。こういった場所へ来るのは初めてなのだろう。

「数年前に出来た大型のショッピングモールでな。200近い店舗があるらしい」

通常の店舗に加え、シアターやスポーツジムも敷地内にはあるらしい。見て回っても楽しめるかも知れないが、今は控えよう。二人を連れ、地下にあるフードストアに向かった。

「うわぁ。すごいかも」

売り場に足を踏み入れて早々、今度はロザが弾んだ声を響かせる。だが正直なところ、久々に来たオレの感想も似たようなものだ。このフロア内で扱っている商品は食品関連のみのはずだが、だとすれば手に入らない食材など無いのではないかと思えるくらいに広大な売り場が広がっている。

陳列棚が延々と続く中を少し歩いた後、オレは二人に指示を出した。

「せっかく来たから、一週間分は買っておきたい。二人で相談して適当に見繕ってくれ」

こういうことは女性に任せたほうが良いだろうと判断し、歩き出した二人のすぐ後ろをついていく。足を進めながら、そういえばアリスは女性なのだろうか、くだらないことを考えた。彼女達自身は、自分のことを女性であると認識している。だが、それはあくまでもそう認識しているに過ぎず、生物学的に男女を分ける染色体等、当然有してはいない。では、その「認識」の部分をソースコードを直接に書き換えて改変してしまえば、オレは男だ、等と言い出すのだろうか。

「冬治さん」

唐突に、背後から名を呼ばれた。振り返らずとも分かる。オレをこう呼ぶ人物は一人しかいない。

「あれ。偶然だね」

首を回すと共に、近寄ってきた美優の顔が視界に入る。細い腕に買いい物かごを提げ、落ち着いた笑顔を見せている。

「お一人でお買い物ですか？」

美優に問われ、首を振って左手で前方を指す。ロザとキリカが、何やら話しながら陳列棚の前にしゃがみ込んでいる。

「あら。何だか冬治さん、お金持ちの人みたいですね」

美優は冗談めかすが、言われてみればその通りだ。アリスが二体、しかも一方はカスタム品だから、最も安く買ったとしても、しめて2700万円。周囲の客からもそう思われているのかもしれない。

「キリカ」

思い至り、前方に声を掛ける。キリカが振り向き、一人こちらへ歩いてきた。

「美優ちゃん、この子が例の」

キリカの引き取り手は、日比野夫妻の紹介で見つけたものだ。キリカに改めてその旨を告げ、美優を紹介する。

「この度はお世話になりました。アリスCタイプ2205、キリカと申します」

丁寧な頭を下げる少女に、美優は笑顔で挨拶を返す。

「優しそうな人だったから、安心してね」

そう言い添えてくれた。キリカもはにかんだ笑顔を見せる。天性のものなのだろう。美優にはどこか、人を安心させる雰囲気がある。

「あっちの子は？」

自分も挨拶をして良いのかどうか迷っているのだろう。ズッキーニを片手にこちらを覗き見ているロザを指し、美優が言った。

「ロザ、お前も来い」

呼べば、嬉しそうに駆け寄ってくる。その姿を見、美優の瞳が僅かに、見開かれた。

「初めまして。本日より朝倉先生の工房でお世話になっています、アリスXタイプ7055、ロザと申します」

キリカ同様丁寧に、お決まりの挨拶を口にする。我に返ったように、美優が急いで笑顔を作った。日比野美優です、と会釈を返す。紹介が終わったところで二人をまた食材選びに戻らせ、今度は美優と並んで、小さな背中を追う。

「わたしの、勘違いかもしれないけど……」

遠慮がちに、途切れ途切れに、美優が口を開く。

「ロザちゃんって、冬治さんの幼馴染の子に、すごく良く似てません？」

「ああ。オレも少し戸惑ってる」

美優とあきらかに、直接の面識は無い。オレの工房に夫妻が訪ねてきたときに、一度写真を見せたことがあるだけだ。あきらの容姿が随分と気に入ったようで、綺麗な子ねと、その時美優は随分とはしゃいでいた。記憶にあるのはそのせいなのだろうが、だとしても大した頭だと思う。

「先生っ」

両手に豆腐を持ったキリカの声を受け、足を速める。不思議な縁です、と呟く美優の聲が、妙に耳に残った。

—Chapter. 2 邂逅【5】（後書き）

次回投稿、11月18日（金）予定です。

Chapter. 2 邂逅 【6】

「それじゃあ、改めて」

二人の用意してくれた夕食を平らげ、研究室でロザと向かい合った。ベッドとチェアに分かれ、昼間の配置を再現する。キリカは自室で後片付けの最中だ。

「調律方針について、ですよ」

これがないと落ち着かないんです。そう言って持ち込んだ例のぬいぐるみを膝に乗せ、ロザはまっすぐにオレを見つめる。オレは顎を引いて肯定の意を示すと、小型端末に要件書を表示して少女へ差し出した。

「そこに記載のあるとおり、調律方針はオレに一任されている。お前の持つ雰囲気、オーナーへの接し方、極端な話、喋り口調だけでも良いだろう。何かしら変わりさえすれば良いと、そう言われている。お前も理解しているな？」

念のための確認だ。ロザは軽く頷いてみせ、滑舌よく、はいと答える。

「結構だ。ではもう一つ聞かせてくれ。率直に言って、どう変わりたい？」

調律されるロザ自身に何かしらの希望があるのなら、それを軸に調律計画を立てればよい。そう考えての問いであったが、少女はゆるく首を振った。

「どのようにでも。先生のお好きなように、変えていただければ嬉しいです」

「成る程な」

オレは立ち上がり、端末を内蔵したデスクを数度、叩いてみせた。

「ここに、今朝まで工房にいたアリスの人格プログラムが格納されている。調律前に取得したバックアップだがな。こいつをお前にインストールして、調律完了。それでもいいんだな？」

無論そんな手抜き作業をするつもりはない。だが、ロザやオーナーの田宮の要求を文面通りに受け取れば、それでも良いということになる。少女は少し考えるような仕草を見せ

「勿論です」

笑顔でそう答えた。

「旦那様のご意思の活きる形でさえあれば、わたしは何だって構いません」

ため息。それでは1日も掛からずに作業が終わってしまう。

通常の調律依頼受諾時、オレはクライアントからの依頼内容を鑑みて、掛かる期間を勘案、決定する。ロザの場合は要求が特殊に過ぎてそれが難しかったため、調律に際しての細かなスケジュールも初めから立てられていない。14日間というのは、オーナーの田宮が自ら指定した期間だ。代金を全額受け取っている以上、相応の業量は自身に課すべきだろう。

「聞いてくれ、ロザ」

言いながら、考える。彼女はアリス。詰まるところ、オーナーである田宮の所有物でしかない。田宮の意思はロザの意思であり、ロザの報ずる全ての事象には、田宮の考えが色濃く反映されてしかるべきだ。少女はアリスとしてそれを誰よりもよく理解し、そのベクトルに従属する。オーナーへの隷属こそが、自身にとっての幸せでもあるからだ。それはアリスとしては当然の、極めて真つ当な論理。言うなれば紛うことなき理のようなもの。だが、本当にそれで良いのだろうか。

「お前がオーナーの、田宮さんの希望に従いたいという気持ちはわかる。それはアリスとして正しいことだし、そうでなくてはいけないとも思う。だが今回の調律作業においては、お前と田宮さんの要望を双方かなえることだって可能だ。違つか？」

ゆっくりと言葉を選びながら話し、そうした自分に少し戸惑う。アリスはオーナーの意思、指示に絶対的な服従を誓う。本当にそれで良いのか等と、何故そんな疑問を抱くのだ。良いに決まっている。

アリスは人ではないのだから。アリスは道具に過ぎないのだから。ロザは少し困惑したような表情で、オレと同じように、言葉を選ぶように喋る。

「旦那様が先生のお好きなように調律を施してもらえと、そのようにおっしゃった以上、そうしていただく以外ないようにわたしは思っています。そうしていただきたいとも、思います」

惑うように視線を彷徨わせながら話す少女に、オレは苛立つ。ふと、もしアリスやキリカが同じことを口にしたら、オレはどう思うのだろうか、疑問が浮かんた。隷属的で消極的な態度に、同じように腹を立てるだろうか。立てないのだとしたら、それは何故だろう。ロザが、ロザだけが、幼馴染に良く似ているからでなかろうか。他者に従属する親しい女性の姿に、嫉妬じみた感情を抱いているからではなかろうか。

「では、こう言おうロザ。お前を、お前のなりたいお前にしてやることが、オレの行いたい調律だ」

はっきりと宣言するつもりが、妙にまどろっこしい言い方になってしまった。意図は伝わっただろうか。ロザは小さく笑い、では、少し考えても良いですかと、優しい目でそう問うた。

「自分がどうなりたいたいかなんて、考えたこともなかったのです。許していただけるのなら、一晩ゆっくり考えたいです」

僅かに頬を染めてはにかみ、少女は言う。無意識にか、小さな手は膝の上のぬいぐるみを忙しく撫で回している。提案をオレが許可すると、ロザは小さな声で礼の言葉を述べた。

「一晩ゆっくり考えたら、明日の朝にでも聞かせてくれ。調律自体は午後からでしょう。それでいいか？」

「はい。お言葉に甘えてじっくり考えちゃいます」

話は終わった。ロザから視線を離し、意味も無くタブレットを弄ぶ。少女の顔を視界の隅に捉えながら、暫し黙考した。アリスやキリカが同じ状況で同じ発言をした時、オレはやはり同じように言えなくてはならない。クライアントは皆、同一の基準に従ってオレに金を

支払っている。であれば、どのアリスやどのクライアントに対しても同様の態度で接するのが、プロとしての誠実な姿勢。幼馴染を思わせるアリスにだけ情を込めて応ずる等、単なる色ボケのやることだ。

研究室の隅に置かれた金属製のラック。一番上の段に、オイル塗れのワンピースが置かれている。アリサが着てきて、自分で汚した一張羅だ。マシーナリーオイルの汚れは恐らくもう落ちないので、廃棄しようと思って忘れていた。姫君は工房にあった忘れ物のワンピースに一昨日着替え、そういえばそのまま着て帰ってしまった。自分のアリスの服装が変わっていることに気付かないあたり、元村も少々呆けているのではないかと埒もないことを考え、同時に思い至る。忘れ物として保管しておいた淡いブルーのあのワンピース。忘れていったのはキリカではなかったか。だとすればオレも気が回らない。アリサの姿を見た際、キリカは目の前の少女が身に纏っているものが自分の持ち物であることに気付いたはずだ。恐らく気を遣って何も言わなかったのだろう。事情を知らないアリサに罪は無い。オレが気付くべきだった。

「戻ろうか、ロザ」

少女を促し、連れ立って自室に向かった。

—Chapter. 2 邂逅【6】（後書き）

遅くなり申し訳ありません。

次回投稿、11月20日（日）予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9026x/>

機巧アリスに口付けを

2011年11月20日01時15分発行